
海の竜騎兵 2

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の竜騎兵2

【Nコード】

N9520D

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

竜騎兵訓練校にも卒業シーズンがやってきた。私も最後の、そして最大の訓練を受けることになった。「海の竜騎兵」の続編です。

卒業とは、つねに突然やってくるものなのだろう。少なくとも私の場合はそうだった。クラスメイトたちも同じような感想をのべていたから、きっと誰にとってもそうなのだろうという気がする。

卒業の直前には卒業試験があり、それに合格しなくてはならないのが学生というものなのだろうが、竜騎兵訓練校では少し事情が違っていた。卒業試験など存在せず、ただ相棒のクジラと二人きりで海にほうり出され、大洋を横断し、訓練校まで自力で戻ってくるという訓練が行われるのだ。それが卒業試験のかわりであり、竜騎兵としての訓練の総仕上げでもあるのだろう。

学生は船に乗せられ、クジラとともに大洋の向こうの端まで運ばれる。そこでエイヤと放たれる。そのあとは誰もサポートしてくれないのだ。1500キロの距離を泳ぎきり、何とか戻ってくるしかない。

こう説明すればひどく過酷な訓練のように聞こえるだろうが、実際はそうでもなかった。公式には否定されているが、学生たちがたどるコースの途中、何カ所かには船が配置され、非常事態に備えている。海軍の他の部隊や空軍も協力してくれ、この時期の訓練海域ではやたらと多くの航空機や艦船を見かけることに気がつくだろう。そういう気づかいには気づかないふりをして、学生たちは横断を試みるのだ。

横断に失敗する学生も、中にはもちろんいる。だが、それで卒業が取り消されるということはない。この横断が『卒業試験』ではなく、ただの『訓練』と呼ばれている理由がそこにある。6年の期間

と莫大^{ばくだい}な費用、専用のクジラを一頭ついやして育ててきた訓練生を簡単に手放すほど、海軍はバカではない。

入学して6年がたち、私もこの横断訓練を受ける日が近づきつつあった。相棒のクジラの名はチビ介といい、仲はとてもよかった。身体は大きいがまだ子供のマッコウクジラで、いつも私に甘えたがった。足音を聞き分け、私がプールに近づくだけで顔を出し、いつも背中からピュツと水を吹いて迎えてくれた。

1500キロの海を2週間かけて横断するのだから、装備はかなりの重量になった。水と同じ比重に調整された小さなカプセルにおさめ、このカプセルは流線型をし、長いロープでもってクジラにながれ、水中をけん引されることになる。

通常であればクジラと竜騎兵は輸送船に積み込まれ、目的の場所まで運ばれる。だが今回、海軍は新しいことを試みる気になったのだ。言ってみれば実験のようなものだが、その第一号に選ばれたのが私だったというのは光栄なのかどうなのか、自分でもよくわからない。

海軍は一機の飛行艇^{ひこうてい}を建造したのだ。飛行艇というのは、滑走路がなくても海面で離着陸できる種類の航空機で、そう珍しいものではない。だが今回のこれは今までにない大型のもので、卵をはらんだ金魚のように大きな機体の内部に、クジラを丸ごと一頭積み込めるだけの水槽を備えていたのだ。

つまり海軍は、この飛行艇を用いれば、世界中どここの海にでも竜騎兵部隊を迅速^{しんそく}に展開できると考えたのだ。私に言わせればバカバカしいとしか言いようのない作戦だが、お偉方は本気だったらしい。事実一機が発注され、落成し、海軍に納入されたのだ。

そうやって、では一度クジラを実際に運んでみるかという段になって、竜騎兵訓練校の大洋横断訓練に白羽の矢が立ったのだ。

私とチビ介がその実験台に選ばれたとき、同級生や先輩たちは同情してくれた。中には、早々と悔やみの言葉をかけてくれた気の早い者もいたほどだ。だがそれも無理はないほどヒトリ国海軍は新しい物好きで無謀で、新型の艦艇やら潜水艦やらでどれだけの失敗を重ねてきたのか、枚^{まい}拳^{きょ}に暇^{いとま}がないほどだ。

それでも命令だから仕方がない。その日が来て私は飛行艇に乗り込み、チビ介は水槽に入れられ、その水槽はウインチを使って、ゆっくりと機内に積み込まれたのだ。

飛行艇はそのままスムーズに離陸することができたのだが、私が10分おきに立ち上がり、機体の後部にある水槽へチビ介の様子を見にゆくものだからパイロットたちは笑っていたが、私は笑われても気にならなかった。竜騎兵とクジラの間にはどれだけ強い絆きずなが生じるものなのか、飛行機乗りたちには理解できないのだろう。逆に私には、飛行機のように金属の塊にすぎず、魂すら持たない物に命を預けることができる男たちの気が知れないというところだ。

水槽の中で、チビ介は機嫌よくしていた。ヒレをわずかに動かすことができるだけの余裕しかないが、水温がうまく調節され、ろ過装置もきちんと作動しているからだろう。手を伸ばし、私は肌をなでてやった。そのとたん飛行機が揺れ、肩いっぱいに水がかかってしまったが、チビ介がキキキと楽しそうに鳴いたので、制服がぬれてしまったことも気にならなかった。

操縦室へ戻ると、もちろんパイロットたちは私のそでの様子に気がついた。パイロットは二人いて、機長が言った。

「すまん。揺れたのは乱気流のせいだ」

「いいんです」私は答えた。

私は操縦室の窓の外を眺めた。晴れた明るい朝で、どこまでも続く海がきらきらと光をはね返している。副操縦士が口を開いた。

「君はスミス提督の孫だというのは本当か？」

「ええ」

パイロットたちは不思議そうな顔をした。

「それがなぜ竜騎兵部隊なんかにいる？ 推薦状をもらって、もつといい部隊だって希望できたんじゃないのかい？」

「あら、竜騎兵も結構おもしろいですよ。クジラはかわいいし」

機長が笑い始めた。

「まるで海のカウボーイみたいなセリフじゃないか。そういえば…」

ところがその瞬間、無線機から声が聞こえ始めたので、おしゃべりはおしまいになった。

「飛行艇404、聞いているか？」と無線機は言った。四十歳ぐらいの男の声だが、海軍司令部の無線担当官だろう。竜騎兵訓練校の前を離陸してからずっと私たちの道案内をしてくれていた。

「こちら404。よく聞こえる」副操縦士が答えた。

「針路を北へ12度振れ。不審な飛行機がいる。我々が知る限り、国内に該当機はない」
がいつき

面倒くさそうに副操縦士は答えた。「民間機じゃないのか？」

「そんな届けはない。問い合わせしてみたが、航空局も知らんと言っている。漁船が見かけて通報してくれたんだが、無線で呼びかけても応答がない。接近し、正体を確かめてくれ。どうせどこぞの飛行学校の学生が道に迷ったのだと思うが」

不機嫌そうに機長が割り込んだ。「おい、こっちは生きたクジラを積んでるんだぞ」

「それは知っているが、おまえらが一番近くにいるんだ。数分で終わる仕事だ。文句言うな」

通信はこれで切れてしまったので、舌打ちをして、機長は操縦桿そつじゅうかんを左に倒すしかなかった。副操縦士と私は顔を見合わせた。

司令部が言ったとおり、目標機の姿が見えてきたのは数分後のことだった。水平線のかなたに、ごく小さな点が銀色に見え始めたのだ。最初に見つけたのは私だった。

「見えたわ」

「どこだ？」私が指さす方向を向き、機長たちは目をこらした。

「あそこです。飛行機に違いありません。銀色の輝きが見えます」

アクセルに手を伸ばし、機長は飛行艇をグイと加速させた。とたんに機体が揺れ、気になったので私はまた立ち上がり、チビ介の様子を見にいった。チビ介はやはり機嫌よくしており、大きな瞳で私を見つめ返した。

操縦室へ戻ってきたときには、飛行艇は目標機にかなり接近していた。双眼鏡を使い、機長が眺めていた。だが、二人の様子がおかしいことにすぐに私は気がついた。副操縦士が無線機のスイッチを入れるのが目に入った。

「こちら404」

返事はすぐにあった。

「こちら司令部だ。なんだった？ 学生の訓練機か？」

機長が手渡してくれたので、私も双眼鏡を向け、窓の外を眺めた。ダイヤルを回してピントを合わせると、相手の姿を大きくはつきりと見ることができた。機長の声が聞こえた。

「こちら404機長、アンダーソンだ。オレの声がわかるか？」

「わかるよ。どうしたんだい？」司令部の担当官が不思議そうな顔をしているのが目に見えるような気がした。機長が続けた。

「オレは今、目標機を間近に見ている。国籍不明。所属も形式も不明。見たことのない機体だ。エンジン形式も不明だな」

「なんだって？」

「目標機にはプロペラがない。胴体もない。まったく見慣れないもので、機体は巨大な三日月かブーメランのような形だ。それでもまっすぐに飛んでいる。ごく薄い後部から排気煙らしいものが出ているから、何かのエンジンを備えているのはたしかだな」

「ロケットの一種じゃないですかね」隣から副操縦士がささやいた。

機長は不満そうな顔をした。「ロケットっていや、鉛筆みたいな形なんだろ？ あれはブーメラン形だぞ」

「でも」私は口をはさんだ。「ブーメランみたいにくるくる回転してはいませんか」

「あー」司令部の男はしびれを切らしたようだった。「それで結局なんなんだね？」

私たちは顔を見合わせ、機長は困ったような顔をした。「要する

に飛行機だが、胴体もプロペラもなく、全体が一つの翼のような形をしているということだ。垂直尾翼もあるが、もうしわけ程度に小さなものだ」

「機体にマークはないか？」

「ないね。新品のフライパンのようにつるんとしている」

「方位は？」

機器を眺め、副操縦士が数値を読み上げた。私は双眼鏡を使い、まだ相手を眺めていた。

「あれの正体は何なのでしょうね？」

私たちは首をかしげ続けるほかなかったのだが、司令部と話すうちに「どうやらハマダラカ空軍の新型機らしい」という結論になった。おそらくテスト飛行中なのだろうが、それがなぜこんな場所にいるのかは推測するしかなかった。ここは明らかにヒトリの領海内であり、あの飛行機は領空侵犯をしているのだ。いくら自信があるのか知らないが、たかだか新型機の試運転で、一歩間違えば戦争につながりかねないそんな危険を犯すものだろうか。わけがわからず、私たちは頭をしぼり続けるしかなかった。

しかし意外にも、その答えを教えてくれたのはあの新型機本人だった。突然機体を震わせ、後部から煙を吹き始めたのだ。

「煙を噴いているぞ！」副操縦士が声を上げた。

私の手から奪い取り、機長は双眼鏡をのぞき込んだ。操縦は副操

縦土に任せる気になったようだ。

「煙だつて？」無線機から声が聞こえる。

「エンジントラブルらしい」機長が答えた。「白い煙だから、燃えているのはエンジンオイルかな。燃料に引火しなきゃいいが」

「ハマダラカの飛行機なんでしょう？」私は言った。

「ああ」機長は無線機に話しかけた。「あいつはどうやら、少し前からエンジン故障をかかえたまま飛び続けていたらしい。だからこんな低空を、しかも飛行艇でも追いつけるほどの低速で飛んでいたんだ」

「なるほど」

「こんな場所にいる理由もそれで説明がつく。公海上で長距離飛行テストでもやっていたのだろうが、こんな緊急事態だ。エンジンが停止してしまう前に、ヒトリの領海を突っ切つてでも、最短距離をとって本国へ帰ろうと試みているんだ」

「それが裏目に出たというわけか」

「何だか知らんが、とうとうエンジンがオシャカになった。見る、高度を下げ始めたぞ」

「おい、まさか墜落するのか？」

機長は口をゆがめて笑った。「敵国の新型機が丸ごと手に入るチャンスじゃないか。もっとも、海底から引き上げることができたら

だがな」

「このあたりの海はそれほど深いわけではありません。800メートルぐらいだと思います」私は言った。「それでも、何かを引き上げるとなると一苦労ですね」

副操縦士は黙って会話を聞いていたが、カーブを描き始めているハマダラカ機に合わせてアクセルをしばらく、すでに操縦桿を倒し始めている。もちろんそのしぐさには機長もすぐに気がついた。司令部にむかって言った。

「やつは機首を風上に向けて立てた。不時着水するつもりなのは明らかだ。となると、ほっともおけん。こちらも着水するぞ。乗員を救助する必要がある」

ところが司令部からの返事はこうだった。

「乗員もそうだが、機体の方にもっと興味がある。乗員に機体を破壊させないよう努力しろ。なんとか手に入りたい」

「海に沈んじまったらどうするね？」

スイッチが切れ、司令部の担当官は一旦マイクロフォンを置いたようだった。その間もハマダラカ機は高度を下げ続け、波が少しでも静かな場所を探している様子だ。旋回しながら、私たちはそれを見守っていた。

司令部からの返事が返ってきたのは、ハマダラカ機の機首が水面に触れるころだった。子供が遊びで投げた平たい石のように水面を切り、前方に大きく波を飛ばした。フラップをいっぱいに広げているのが見える。

私たちはその真上を横切ったのだが、いくらアクセルをしばっていても、こちらも空を飛んでいるのだ。あっという間を通り過ぎ、ハマダラカ機は背後に見えなくなってしまった。操縦桿を倒し、副操縦士が急旋回を始めたのは言うまでもない。

「着水後、もしもハマダラカ機が沈没を始めた場合には」無線機からふたたび声が聞こえ始めた。「竜騎兵とクジラを海に下ろせ。沈没する機体を海底まで追跡させる。沈没場所を確認しだい、竜騎兵は水面に戻ってこい」

「おい」機長は不満そうに声を上げた。「この竜騎兵は正規兵じゃない。ただの訓練生なんだ。学生にそんな仕事をさせるつもりか？」

だが司令部は意に介さず、担当官は同じことを繰り返すばかりだった。

「竜騎兵、命令は聞こえたか？　すでに応援がそちらへむかいつつある。おまえは24時間だけ機体のお守りをすればいい。そのあと正規兵と交代させてやる。なあと、まだ機体が沈むと決まったわけじゃないさ……」

副操縦士が機長の肩をちょんちょんとつつくのが目に入った。機長が振り向くと、副操縦士は窓の外を指さした。

ハマダラカ機はすでにほとんど停止し、波の上に浮かんでいた。まるで平らで大きな葉が水に浮かんでいるかのような眺めだ。着水体勢に入りながら、私たちはもう一度その真上を通り過ぎた。操縦室の上部にある四角いハッチが開き、乗員たちがはい出してくるのが見えた。

乗員は3人いるようだったが、そのうちの一人がゴムボートの用意を始めているのが目についた。飛行艇は最後の旋回を終え、ねらいをつけて着水に入った。

シートに座ってベルトを締めると、私がいる場所からは窓の外はほとんど見えなくなってしまった。着水した瞬間には飛行艇がボヨンと大きく揺れ、まるで巨大な豚肉の脂肪の上に落とされたかのような気分がする。しかし飛行艇の底部と水はすぐにケンカを始め、ゴトゴトという振動が足の裏に伝わってくる。だがついには水が負けを認め、飛行艇を受け入れるのだ。そのころには飛行艇の速度もずいぶんと落ちていて、そのあとの揺れ方は普通の船とあまり変わらない。

すぐにシートベルトをはずし、私はチビ介の様子を見にいった。突然の揺れで少しびっくりしている顔つきだったが、チビ介は元気だった。私の顔を見ると胸びれをぱたと動かしたので、私はほっとした。

ドアを開けて操縦室に戻ると、男たちが振り返った。その様子が何だか普通ではないことに私は気がついた。「どうかしたんですか？」

機長が口を開いた。「ああ竜騎兵。ハマダラカ機が今しがた沈没したところだ」

乗員たちの救助は機長と副操縦士に任せ、私は再び機体の後部へ走っていった。乗員たちの乗ったポートは、おとぎ話の小人を乗せた木靴のように波の上で揺れている。すでにオールを取り出し、こちらへむかってこぎ始めているのが見える。

私は海面に目を走らせた。透明度の高い海にハマダラカ機の機体は完全に包まれてしまっているが、銀色の影はまだ水の下に見ることが出来る。機械油が水面をただよい始めている。

おそらく機体に大きな穴は開いていないのだろう。内部に少しは水が侵入しているかもしれないが、まだ空気が入ったままのスペースもたくさんあるのだろう。だから石のようにストーンと沈んでしまわずに、ああやって水中をただよっているのだ。

だがそれも長い時間のことではないだろう。いつか空気が抜け、重くなった機体は海底へむかって落ちてゆくだろう。

大洋には珍しく、このあたりの水深は800メートルほどしかなかった。大洋では数千メートルを越えることは珍しくないが、なぜかこのあたりだけは浅くなっているのだ。太古に島ができかけ浅くなりかけたが、結局は水面に頭を出すには到らなかったのか、それとも大昔には島や大陸が存在したのが、大地震か何かで海中に沈没したか。学者たちは今でもさかんに議論を戦わせている。

ジリジリとベルが鳴り、壁際にある機内電話が呼んでいることに気がついた。駆け寄って受話器を耳にあてると、機長の声が聞こえてきた。

「乗員は救助した。そっちの具合はどうだ？」

「待ってください」長い電話線を引きずって機体の一番後ろへ行き、私は窓の外をのぞき込んだ。小さな丸い窓だが、海の様子は十分見ることが出来る。「波はOKです。十分クジラを降ろせます。今から後部ハッチを開けます」

「一人でやれるか？」

「やれると思います」

「すまん。手伝えればいいのだが、こちらはお客さんが3人もいてな」

「様子はどうです？」

「ケガはしていない。機嫌は悪そうだが」

「そうでしょうね」

「本当に助けは要らないんだな？」

「ええ、大丈夫です」

「よし」

受話器を置き、私は準備に取りかかった。

制服を脱いで水着に着替え、水槽の上に身を乗り出すと、チビ介が歓迎してくれた。私の興奮が伝わっているのだろう。尾びれをゆ

つくりと動かし始めている。

水温調整装置とろ過装置のスイッチを切り、私は後部ハッチを開き始めた。ウーインというモーターの低い音が聞こえ始める。後部ハッチは大きく広く、機体の幅いっぱい大きさがある。開いてゆくにつれ、海の風景が目の前に広がってゆくのだ。風が吹き込み、身体にしぶきがかかり始める。

ハッチが開ききったところで私はウインチのスイッチを入れ、チビ介の入っている水槽をゆつくりと移動させ始めた。カマキリが卵を生むときのようにして、飛行艇の後ろから海面へむかって降ろしてゆくのだ。水槽が移動するにつれ重心がかたよるので、飛行艇の機首がゆつくりと持ち上がり始める。

水槽の底部はすでに水に洗われ始めている。波の音を感じることができなのか、チビ介がぐるりと目玉を動かした。

水槽を水に降ろし、門を開いてやると、チビ介はさつと海中に泳ぎ出た。せまい場所から自由になることができてせいせいしているという表情だ。冷蔵庫から引っぱり出してきた魚を一匹投げてやると、チビ介は一口でのみ込んでしまった。

次は私が潜水服を身につける番だった。機内には小型のクレーンがあり、私の潜水服をつるしている。丈夫な金属でできていて、重さが二百キロ以上あるとんでもないものだ。

スイッチを操作し、私はそれをゆつくりと水面へ降ろしていった。チビ介はもう潜水服に寄りそい、私が着込むのを今か今かと待っている。

深呼吸をして、私は海に飛び込んだ。すでに潜水服は完全に水中にあるが、主がないので、波を受けて海草のようにゆらゆらと揺れている。ごついばかりで、美しさのカケラもない代物だが、私は身につけるのが楽しみで仕方なかった。あれを着れば、私も海の生物の仲間入りをすることができるのだ。

不意に背中に触れたことに気がついたが、優しい触れ方だったから、振り向かなくても誰かはわかっていた。あの大きな額で、チビ介が私を押しているのだ。早く潜水服のところへ行かせようというのだろつ。

私は潜水服の中へ身体を滑り込ませた。ひんやりとした冷たさが肌に触れる。ヘルメットをかぶり、しっかりとネジをとめはじめた。その様子を、チビ介は楽しそうに見つめている。

私のヘルメットからは金属製の長いパイプが伸びている。空気が通るパイプなのだが、私がそれを手に取ると、チビ介はいそいそと頭を寄せてきた。その背中をたどり、チビ介の呼吸口に取り付けてある接続装置に私はパイプを力チンと接続した。コックを開くと、チビ介の肺の内部にある空気がしゅっと飛び込んできた。水中では、私はチビ介から空気をもらって呼吸するのだ。竜騎兵とクジラは一つの空気を分け合って生きているのだ。

胸びれをぼんぼんとたたき、私はチビ介を前進させた。彼の巨大な首のまわりに渡されているベルトに手をかけ、身体のバランスを取った。

ゆっくりと回り込むようにして、チビ介は飛行艇の機首へと近づいていった。窓の向こうに男たちがいるのが見える。機長と副操縦士と、見慣れない制服を着た3人だ。この三人は体力と神経をすり

減らし、疲れきった様子に見える。それも無理はないと思うが。

おそらく機長たちはすでに三人から武器を取り上げていることだろうし、ヒトリ軍から応援も駆けつけつつあるのだ。ハマダラカ兵たちも、ここで騒ぎを起こすほどバカではないだろう。

片手を振り、私は機長たちに合図を送った。副操縦士が手を振り、口を大きく開けて何か言ったようだったが、もちろん私には聞こえなかった。チビ介に指示を送り、私は潜水を始めた。

ハマダラカ機の姿は、もちろんすぐに見つけることができた。ひどく奇妙な形をしているとはいえ、一人前の爆撃機なのだ。水中をただよっているのを見落とすはずがない。私とチビ介はゆっくりと接近していった。

爆撃機は本当にブーメランのような形をしていた。羽根を折りたたんだときのガの姿に似ていると言えなくもない。操縦室は不釣合いに小さく、遠慮して機体のはしにちょこんと取り付けられている感じがした。エンジンのことを思い出し、私は尾部へまわってみることにした。

機首にはもちろん、尾部にもプロペラなど影もなかった。尾部にはただ見慣れない丸い穴が3つ開いているだけだ。機首のわきにある取り入れ口から空気を取り入れ、それをどうにかして勢いよく後ろから噴き出し、ロケットのようにして前進するのかもしれないと思った。これがジェットエンジンと呼ばれる新しい技術だと聞かされたのは、この作戦がすべて終わったあとのことだった。

猟師に撃たれて墜落して、木の枝に足が引っかかってしまった鳥のように、爆撃機は逆立ちをするような形で水中をただよっていた。

深さ数十メートルのところで、沈むでもなく浮かぶでもなくじっとしているのだ。だがエンジンの排気口から小さな泡が、少しずつ水面へ向かって立ち昇っているのが見えている。空気が逃げ、海水が機内を少しずつ満たしていきつつあるのだろう。この機体は、いずれ海底へ向かって落下を始めるに違いない。

どうすることもできないまま、私は爆撃機のまわりをチビ介に何回か旋回させた。始めのうちはチビ介も興味を持っていたが、すぐにあきてしまったようだ。食べることができないものに対しては、彼は関心を持続することができないのだろう。最初の興奮がすぎて、正直に言うと、私もあくびをかみ殺すのに苦労を感じ始めていた。

応援部隊が到着したのは二時間後のことだった。水中から見上げると、きらきら光る水面に飛行艇404のおなかの形がくっきりと見えているのだが、そこへ突然別の飛行艇の姿が混じったのだ。大きな三角形の波を起こして着水し、こちらへ近寄ってくる。それも一つではなく、同じものを3つ見つけることができた。404号ほど大型ではないが、海軍の飛行艇部隊だろう。これはかなり大きな作戦になりつつあるようだった。

だが私は持ち場を離れるわけにはいかなかった。正規の竜騎兵部隊が現れ、交代してくれるまではここにいないてはならない。竜騎兵は船に乗ってやってくるから、到着はまだまだ先のことだろう。

2時間に一度、空気を吸うためにチビ介を水面へ上昇させた。それ以外はまるで水族館の水槽の中のサメのように、同じ場所をぐるぐると回り続けるだけの退屈な仕事だった。チビ介も退屈しているので、ときどきおなかの下にもぐりこんで、くすぐって遊んでやらなくてはならなかった。そうしながらも私は、目のすみでじっと爆

撃機を監視していた。

ゆっくりとしているが、しっかりした海流がここにもあるようだった。飛行艇たちの底部がだんだんと遠ざかってゆくのだ。すでに深度は100メートルを超えていたからもはや爆撃機の姿を見ることができず、水上の連中は気づいていないのだろう。だがそれは大きな問題ではなかった。爆撃機的位置は私一人が把握はあくしていればいい。

チビ介が二度目の呼吸をすませるころには、私はもう退屈でどうしようもなくなっていた。五分おきに腕時計をのぞき込んでいたが、針がほんの少し前へ進んでいるだけなのをそのたびに発見して、ため息をついた。だがそういう退屈も、いつまでも続くものではないのかもしれない。

それはまるで、戸棚から物が落ちるときのように急激に始まった。予告も何もなく、爆撃機がずるりと20メートルばかり下へ落ちたのだ。はっとしてそちらに身体を向けたが、何が起きているのか理解するのに何秒かかかってしまった。

爆撃機の翼は左右に長く伸びている。飛び立つときの白鳥のような優雅な眺めだが、翼の先端に奇妙な形の部品が取り付けてあることに私は気がついていった。特殊な形のアンテナかと思っていたのだが、気流を整え、空気抵抗を減らすためのものだったのかもしれない。中世の坊さんがかぶる帽子のような形のものだが、それが突然本体から外れたのだ。

外れた部品は一旦は浮かび上がりかけたが、すぐに上下逆さまにひっくり返り、内部にあった空気が泡になって逃げ出してゆくのが見えた。

だがそれと同時に、もっと大きなことが起こったのだ。爆撃機の内部に残った空気を押さえつけている最後の**砦**^{とりで}があ部の部品だったよ
うなのだ。それが外れてしまったあとには大きな穴が開き、驚くほど大量の空気がそこから噴き出し始めた。ゴボゴボいう泡の音が私の耳にまで聞こえてきたほどだ。

その空気はあまりにも大量で、まるで上下逆さまになった滝の水のように、水面へ向けてものすごい勢いで立ち昇っていった。

私は思わず見上げていたが、のんびりしてはいられないことにすぐに気がついた。内部の空気を失って、爆撃機は本格的に落下を始

めるに違いない。

まったく思ったとおりだった。まわりの海水を激しくかき回しながら、爆撃機は海底へ向けて進み始めたのだ。泡の噴き出しはまだ続いている。いくらもたたないうちに、機内の空気はすべて失われてしまいかもしれない。

私は思わず下を向いた。爆撃機が旅立っていこうとしている方向だ。そして、私とチビ介がこれから追いかけていかなくてはならない場所でもある。光の届かない真っ暗な深海で、深い井戸の底かインクつぼの中をのぞき込んでいるときのような気がする。

深度が増して太陽の光が届きにくくなっているせいで、爆撃機はもはや銀色ではなく、死んだ魚のように白くぼうつとして見える。あまり気持ちのよい眺めではない。だが私には選択の余地はなかった。チビ介に合図を送り、爆撃機を追いかけ始めた。身体をひるがえらせ、チビ介はしなやかに向きを変えた。

真っ暗な降下を続けながら、私はチラチラと深度計を眺めていた。もちろん目盛りは次第に増してゆくのだが、思ったほど急なペースではなかった。石ころのようにストンとはなく、少しゆっくりとしているのだ。翼の先端から吹き出す泡はすでに止まっているが、機内にはまだいくらか空気が残っているのかもしれない。

すぐに私のまわりは完全な暗闇になり、目に入るのは懐中電灯の黄色い明かりだけになった。この暗闇の中でも、もちろんチビ介にはまわりの様子がよくわかつているのに違いなかった。人間の耳には聞こえない種類の音波を発し、その反射具合で周囲の地形や障害物、他の生物の姿などを判断しているのだ。だからチビ介には、降下してゆく爆撃機の姿もはっきりととらえられているはずだった。

私たちはゆつくりと降下を続けた。降下率を調べ、海底まで何分かかかるのか計算してみようとした。だが海底までの距離がわからないことに気がついた。私が知っているのは800メートル程度だということにすぎず、正確な知識とはいえなかった。

始めのうちはそうではなかったが、見かける魚の数は次第に少なくなっていく。そしてとうとう、小型のサメが一匹懐中電灯の光の中に姿を見せたのを最後に、何一つ目にすることはなくなってしまった。深度計は600メートルを指している。爆撃機は降下を続けている。チビ介は平気な顔で泳ぎ続けている。

懐中電灯の光の中に、海底の砂地が姿を見せ始めたときには、ほっとして私はヘルメットの中で息をついた。それに気づいたのか、目玉を動かしてチビ介が私を見たので、黒い滑らかな肌をぽんぽんとたたいてやった。

砂におおわれ、海底は本当に砂漠のような眺めだったが、近づいてゆくに連れ、私は奇妙なことに気がついた。表面に輪郭がわずかに浮き出ていたり、一部が顔を出していたりするだけなのだが、砂の下に何かは何十も何百も埋もれているようなのだ。

何だろうと私は目をこらしたが、爆撃機が海底に達したのはその瞬間だった。機首を砂にめり込ませ、あまり速い速度ではなかったが衝突したのだ。ドオンという音が水中を伝わり、私はぎくりとした。チビ介はすでに速度をゆるめはじめている。

海底の砂をえぐり、一部を煙のように巻き上げながら、爆撃機は停止した。そのまま逆立ちをするように立ち続けたが、それも一瞬のことで、すぐにめりめりと音を立てて倒れ始めた。

ピザのように平たい巨大な機体なのだ。それが倒れるときのことを想像してみてほしい。巨大な扇子せんすのように海中に波を起こしたのだ、波は砂をさらに巻き上げ、海底はほとんど何も見えなくなった。あまりの勢いだったので、砂の中に埋もれていたものまでいくつか動かされ、水中を何メートルも舞ったほどだ。

懐中電灯を向け、私とチビ介はその様子をすべて見ていたのだ。あたりを埋めつくすかのように砂の中に隠されていた物たちの正体を私は一瞬で理解していた。一個や二個であれば、海底では珍しい物体ではなかった。だがその数の多さに私は驚いていたのだ。それが懐中電灯の光が届く範囲を埋めつくしているのであれば、少なくとも何千という数であるに違いないではないか。

埋もれている物の正体を見て、チビ介が特にショックを受けているようではないのは意外ではあった。だがきつと種類が異なっているからだろう。ということはつまり、この海底を埋めつくしている骨は、大きさから見てクジラのものには違いないだろうが、少なくともマッコウクジラのものではないのだろう。

砂煙がおさまると、海底の様子をもっとよく見ることができるようになった。爆撃機は、子供が置き忘れた帽子のように完全に上下逆さまになっていた。普段あまり見えない腹部を上に向けているのだ。エンジンを点検するためだろうが、大きなハッチのようなものがいくつか並んでいることに気がついた。

だがそんなことよりも、クジラの墓場を発見したことのほうが、私をよほどぞくぞくさせていた。何世紀にもわたり、その存在が船乗りたちの間でささやかれ続けてきたものだ。年を取ったり大きな傷を受けたりしたクジラは群れを離れ、一人でその場所へむかうと

言われていた。

大洋の中心、深海のどこかにあるともされていた。クジラたちはそこで死を迎え、太古からの先祖たちの間に混じり、しかばねをさらすのだ。私はその墓場を発見したのだった。身体の中を興奮が駆け抜けるのを感じないではいらなかった。

爆撃機のことなど忘れてしまい、私は海底を見回し続けた。滑車をいくつも連ねたような形の背骨やアーチ型のろっ骨、頭蓋骨を簡単に見分けることができる。皮膚や肉は完全に失われ、すべて骨だけになってしまっている。

これがかつてはみな生きていて、海の中を駆けまわっていたのだ。私が生まれるずっと以前、それどころか最古のものは、人類が文明を持つようになる前からここに横たわっているのだろう。思わずため息をつかないではいらなかった。

だがチビ介は、すでに退屈を感じ始めているようだった。チビ介はまだ若く、死など実感のわかないまだ先の出来事なのだろう。マッコウクジラの寿命は50年にもおよぶのだから無理はない。それにこれはマッコウクジラの墓場ではないのだ。何か別の種類のクジラの墓場なのだろう。

それがどういう種類なのか、もちろん私にもわからなかった。骨や頭蓋骨を見るだけでクジラの種類がわかるような訓練など、私は受けたことがない。それは竜騎兵ではなく、動物学者の仕事だ。

懐中電灯をとし、私はまだ墓場を見回し続けていたが、興奮が収まってゆくにつれ、やるべき仕事があることを思い出した。爆撃機が落下した正確な地点を水上の連中に伝えなくてはならないのだ。

降下を続けながら、途中の通過地点を私は海図上にメモし続けていた。だから爆撃機の落下地点もすでに海図に記録できていたのだ。これを水の上に持って上がり、指揮官に見せれば私の仕事は終わるわけだった。

ほっとした気分になり、私はチビ介を水面へ向かわせようとした。クジラの胃袋は巨大だ。もうそろそろ空腹を感じ始めているころだろう。指先で肌に触れ、浮上するようにと私はチビ介に指示を出した。だが、そのとき奇妙なことが起こったのだ。

チビ介が私の指示に反応しないのだ。いつもならすぐにいうことをきくものが、なぜか身体を動かさずともしないのだ。

指示の出し方が悪かったのかもしれないと思い、私はもう一度繰り返した。だが結果は同じだった。チビ介はひれの先まで身体を緊張させ、ある方向へむかって注意を集中している。私の指示になど気づいてもいないのだろう。

私はチビ介の瞳をのぞき込んだ。そして再び驚きを感じなくてはならなかった。こんなに暗い海中であれば、チビ介の瞳孔はいつぱいに開いているはずだった。だがそれがうんと小さくなってしまっている。もちろんそれは一瞬のことであり、あっという間に正常に戻ったが、次にチビ介は忙しく目玉を前後左右に動かし始めるではないか。

チビ介は何かに対して強い警戒を感じているのだ。だがそれが何に対してなのかわからず、落ち着かせようと私はチビ介の胸に触れたが、心臓が高速艇のエンジンのように速く打っているのが感じられただけだった。

懐中電灯の光を最大に強くし、私は前方へ向けた。深海は透明度が高く、浅い海よりも遠くまで見通すことができた。やがて光の輪の中に、巨大な白い鼻がぼんやりと姿を現した。

もちろんまだ近くではなかった。距離は200メートル以上はあっただろう。それでもあの大きさに見えるということは、とんでもなく大きなクジラに違いない。

もちろん生きているクジラだ。種類は青クジラで、それは鼻の形と体色から見間違いようがない。だが私は、青クジラであれなんであれ、あれほど巨大な個体は見たことがなかった。体長は30メートルどころか、40メートル近いだろう。皮膚は青みがかった灰色だが無数に傷があり、そのせいでクモの巣がかかったように白く見える。

再び肌に触れて、私はなんとかチビ介の注意を引くことに成功した。そのまま水中を降下させ、ほとんど腹ばいといっていいほどにまで海底へ近づかせた。

ゆっくりとだが、相手はまっすぐに近寄ってくる。あの大きさではオスということはないだろう。青クジラは、オスよりもメスのほうがよっぽど身体が大きいのだ。

もちろんあの青クジラは、私とチビ介の存在に気づいているに違いなかった。クジラは海中の様子を音で知ることができるわけだし、私は懐中電灯を点灯させているのだ。だがもう懐中電灯のスイッチを切るわけにはいかなかった。もし切ってしまったら、あの青クジラが次にどういう行動を取るつもりなのか、私は知る方法がなくなってしまう。

マッコウクジラと違い、青クジラは小エビを主な食べ物としてい

る。あの大きな身体をそんな小さなもので支えているというのは不思議な気もするが、そもそも青クジラというのはあまり凶暴な動物ではない。少なくとも私はそう教えられていた。

爆撃機のまわりで、青クジラは旋回を始めた。海底に鼻を近づけ、まるで犬が匂いをかぎまわるときのようなくさだ。鼻を接触させるようなことはしないが、なにやらさかんに調べているようだ。その様子から、やつはひどく近眼なのではないかという気がした。

チビ介と同じように、そもそもクジラは爆撃機になど関心を示さないものだと思う。食べてもうまくはないからだ。青クジラの表情も始めはそういう感じだった。だがそれも、爆撃機の機首が海底を大きく掘り返し、仲間たちの骨を砂の上にさらし、いくつかを重みで破壊してしまっていることに気づくまでのことだった。

クジラが怒りに震える瞬間というものを、私は始めて目にした。背中が盛り上がり、呼吸口のあたりが大きく緊張したようだ。だが怒りにまかせて貴重な空気を噴き上げてしまうことは、何とか理性が押しとどめたのだろう。頭を動かし、私たちをじろりと見た。

もしクジラ語が話せるのであれば、私はすぐに弁明を始めたことだろう。チビ介も手伝ってくれたに違いない。だがあいにく、クジラ語がわかる者など地上には存在しない。青クジラの表情から私が高んとか理解したのは、墓場を荒らし、仲間たちの死体を冒瀆した犯人はこの私であると思っているらしいということだった。

40メートル近い青クジラににらみつけられて、私だけでなくチビ介もすっかりおびえてしまっていた。尾を腹部に引き寄せ、赤ん坊のように丸くなるうとしている。私たちはジリジリと後ずさりを始めた。

青クジラまでの距離はもういくらもなかった。懐中電灯に照らし出され、相手の様子をすみずみまで眺めることができた。

犬やネコなどと比べて、クジラは非常に大きな頭蓋骨を持っている。その内部にこれまた巨大な脳が収まっているのだが、この青クジラの頭の右側、少し斜めになったあたりに何かが見えることに私は気がついた。

自然のものではなく、何か余計なものが引つかかっているようなのだ。クジラの皮膚にフジツボやモのようなものが生えているのはよくあることで、別に珍しくはない。だがこのクジラにあるのは、そんなものではなかったのだ。

棒のような形をしていた。いや、杭くいというほうがいいかもしれない。表面がモにおおわれているので木なのか鉄なのか材質はわからないのだが、少なくとも１メートル以上身体から突き出している。何十年も前からある古いもののようにだ。

もちろん私はすぐに、捕鯨の際に漁師たちが使うモリを思い出していた。太くて長いヤリのようなもので、先端は鋭くとがらせてある。一度刺さると抜けないように、体内に入ると先端が開く構造になったものもあると聞いたことがある。

だが小船をこぎ寄せ、人が手で投げてモリを打ち込んでいたのは何十年も昔のことだ。今でも捕鯨は行われているが、現代のモリは大砲のように火薬で発射されるようになっていて。もしあれが本当に漁師のモリだとすれば、何十年も前からあそこに突き刺さっていることになるのだが。

そのモリの根元に何かがからみついていることに私は気がついた。

人間というのは、どんな場合にも好奇心を失わないものだと思う。仲間の墓を荒らされた怒りで体中をいっぱいになっている青クジラの前で、私はモリの根元の様子を観察しはじめていたのだ。

モリの根元からみついているのはクサリだとすぐにわかった。通常はロープを使うものだが、あのモリにはなぜかクサリがくくりつけられていたのかもしれない。長いものではないが、しっかりと何重にも巻き付いている。そのせいで何十年たっても外れてしまうことがなかったのだろう。

だが次の瞬間、私はヘルメットの中であつと大きな声を上げてしまった。あのクサリが巻き付いて何十年間も放さずにいたものは、モリだけではなかったのだ。モリと一緒に、クサリは人間の腕をも巻き込んでいた。

もちろんとつくに骨になってしまっているが、がっしりとした長い腕だ。おそらく漁師のものだろう。船の上からモリを投げたのではなく、クジラの背中に飛び乗り、全身の力を込めて突き立てたのかもしれない。

そう考えると、モリにロープではなくクサリがつながれている理由もわかるような気がした。何十年か前のある時期、このクジラはある男のすさまじい敵意と執念の対象となったことがあるのだろう。

その男はもちろんすでに死んでいることだろう。海中で腕を引きちぎられては、生きていることはできまい。だがその執念のあかしとして、相手の体に自分の腕を残したのだ。

その腕が現在まで残っているのは、もちろん偶然の産物に過ぎない。モリが抜けず、クサリも切れてしまわなかったというだけのことだ。しかしあの青クジラはあの腕を勲章として、人生の最後の瞬間までその身に飾り続けるのだろう。

だが私のそんな空想も、不意に中断されてしまった。体中の筋肉をバネのように使ってチビ介が突然前に飛び出し、青クジラの鼻先をよこぎって泳ぎ始めたのだ。

夢の中でさえ、あんなに恐ろしいものに追いかけられた経験は私にはなかった。チビ介は全力で尾びれを動かし、私も必死になってつかまっているのだ。振り返ると、幽霊のような白い巨大な顔がそこにある。

マッコウクジラやイルカなどと違って、ヒゲクジラと呼ばれる連中は独特の顔つきをしている。陸上動物などとはまったく異なるデザインセンスだ。進化の神はいったい何を考えてこんな顔に作ったのだろうという気がしてくるほどだ。口の開き方でさえ他の動物とは異なり、まるでどがったペンチか植木バサミのような動きをするのだ。そして口の中には歯など一本もなく、長いヒゲがカーテンのようにびっしりと生えているだけなのだ。

巨大な青クジラに負われ、チビ介と私は海中を逃げ続けた。爆撃機などとつくに見えなくなってしまうている。目の下には、クジラの骨が無数にうずまっている砂地がデコボコと続いている。

私たちは全力疾走を続けた。だが疲れを見せる気配はまったくなく、青クジラはぴたりと後ろにつけている。チビ介はときどき進路を左右に変えるが、あわてるふうもなくきちんとついてくる。青クジラが身体を揺らすたびに、白骨になったあの腕もゆらゆらと動く

のだ。それがまるで「やあ」と手を振っているかのように見えるではないか。

砂地が突然終わり、海底が岩肌が変わった。角ばった白っぽい岩で、小さなヒビが無数に入っている。だがそれも少しの間のことではがなく、気がついたときには、私たちは何も無い空間に向かつて勢いよく飛び出してゆくところだった。台地のような部分がガケになって突然終わり、海底の谷が不意に顔を出したのだ。

だが谷といっても、これほどのサイズのものは陸上には存在しないかもしれない。まるで落とし戸が開いたかのような暗闇が広がっているばかりで、私たちの下方にはまったく何もなくなってしまうのだ。

海図をたぐり寄せ、私は目をこらした。何枚かページをめくらなくてはならなかった。もちろん青クジラはまだ追いかけてきている。あの口を開け閉めし、私たちを飲み込まないまでも、手足の一本、ヒレの一枚でもむしりとしてやろうというのかもしれない。

爆撃機からはすでに数キロ離れてしまっているに違いなかった。だが青クジラは疲れるどころか、追跡をあきらめる様子もない。私はチビ介のことが気になり始めていた。すでにかんりの疲労を感じているに違いない。もちろんそんな気配はまだ見せていないが、それほど必死になって泳いでいるということなのだろう。

いくらチビ介でも、何時間も高速で泳ぎ続けることはできない。ところが青クジラのほうは、長距離ランナーとして知られている種類なのだ。これは何とかしなくてはならなかった。

信号銃で青クジラの顔をねらい、引き金を引くことも考えはした

が、そんなものでは何の役にも立たないだろうとすぐに思い直した。しかし、もっと大きく重いものをぶつけてやれば、いくらやつてもひるむかもしれない。

指示を出し、私はチビ介を水面へ向かわせることにした。すぐにいうことをきき、チビ介は鼻を上に向けた。

夜明けの空のように薄明るくぼんやりと輝く水面へむかって、私たちは上っていった。もちろん青クジラはぴったりとついてくる。見ていると再び口を開き、それがまるでニタリと笑っているように思えて、ぞつとしないではいられなかった。

私は片目で深度計をにらんでいた。まわりはどんどん明るさを増し、たまたまいたイワシの群れの中央を突っ切ったときには、イワシたちは驚いて左右に分かれ、巣穴の中に不意に水が入ってきたときのアリたちのように大騒ぎをしていたが、気にしている余裕はなかった。いつもであればチビ介も目を輝かせただろうが、彼にもそういう余裕はないようだった。

水面が近づいてきた。しわの入ったシーツのように、もう波の様子を見分けることができるほどだ。再び指示を出し、私はチビ介を水面すれすれに泳がせた。

ベルトをつかみながらはい上がり、私はチビ介の背中へ移動した。私は何をしようとしているのか、もうチビ介は気がついていたのか、もしれない。

接続装置に取り付き、私はチビ介の身体から空気パイプを引き抜いた。内部を空気が流れ、チビ介の肺と私の潜水服をつないでいるものだ。パイプが外されたことに気づき、チビ介は反射的に水面に

背中を出した。私の身体は太陽の光を浴び、波に洗われることになる。とたんに水の抵抗が増し、速度が落ち始めたので、のんびりしている余裕はなかった。

パイプをほうり出し、私は潜水服を脱いでいった。そしてとうとう潜水服から抜け出し、チビ介の胸のまわりを取り巻いているベルトにつかまりなおしたのだ。

強い水流と波に押され、潜水服は一瞬でチビ介の背中から滑り落ちていった。青クジラのでかい頭はそのすぐ後ろにあるのだ。ねらいをはずすことなどありえなかった。

あんなに大きなクジラなのだから、少々潜水服をぶつけられたくらいではどうということはないと思うかもしれない。だが竜騎兵の潜水服は金属でできた特別製のもので、重さは二百キロ以上あるのだ。そんなものが鼻先に命中して、平気でいられる者はいない。

私は振り返り、攻撃の効果があつたかどうか確かめようとした。そして想像以上の結果を得て、声を上げて笑ってしまった。思わず背中をたたくと、「どうしたのだろう？」とチビ介がちりと目を上げるのが感じられた。

潜水服が滑り落ちていった瞬間、青クジラは口を大きく開けていたらしい。そうやって再び私たちを威嚇するつもりでいたのかもしれない。その口の中へ、潜水服はまともに飛び込んでいったのだ。

クジラが目を白黒させる様子を、私は生まれて始めて目にした。それほどうまい具合に、潜水服はすっぽりとはまり込んでいたのだ。潜水服は頭から飛び込んでいったので、金属製の脚が二本、やつのアゴの間から角のように突き出している。おまけに口の端からは空

気パイプを長くだらんと引きずっている。まるでナマズのような顔つきではないか。

あんなにおもしろい眺めは一度も見たことがないような気がする。声を上げて、私は笑い続けた。

だが勝利に夢中になって、私は注意がおろそかになっていたに違いない。あつと気がついたときにはチビ介の背中の上でひざが滑り、あわててベルトをつかみなおそうとしたのだが、それから手が滑ってしまったのだ。

クジラの背中の上はつるつるしている。他につかまるものなどありはしない。川の急流の滑りやすい岩の上にいるときのことを考えてみてほしい。足をすくわれ、私の身体はそのまま流されていった。

マッコウクジラには、つかまることができそうな背びれはない。だから私は一瞬で海に落ち、よくたたかれずにすんだものだと思う。チビ介の巨大な尾びれのわきを通り過ぎ、青クジラの口の中へまっすぐに飛び込んでいったのだ。

潜水服のせいで、青クジラは口を閉じることができなくなっている。でもだからといって、その口の中へ飛び込むのが楽しくなるわけではない。チビ介の口の中なら、私はいつも目にしていた。日に一度、ブラシを持って入り、掃除をしてやるからだ。

プールの中であおむけになり、チビ介は口を大きく開ける。まるで飼い主に甘えるネコのようなしぐさだが、私は口の中に入って掃除を始めるのだ。牛の角のようにとがった歯がずらりと並んでいるのはなかなかの眺めだが、口の中の皮膚はピンク色でやわらかく、新鮮なミカンのような張りや弾力がある。

だが青クジラの口の中はまったく違っていた。チビ介の口は普通の犬やネコと同じような開き方をするが、青クジラの口の中にいる

と、まるで巨大なスプーンの上に乗せられているかのような気がする。おまけに頭上からは、すだれのように長いヒゲが垂れ下がっているのだ。巨大なツケヒゲのオバケとでもいう感じで、私は思わず口の奥をのぞきこんでみないではいられなかった。

口からのどにつながり、その先は胃袋に達している。そこまで行くとも私消化されてしまうわけだが、口からのどへ通じる部分の直径は意外と小さく、どう間違っても私が呑み込まれてしまうことはありそうもなかった。直径20センチもない穴でしかなく、青クジラは小エビを丸呑みにするだけだから、これでいいのだろう。

私が口の中に飛び込んできたことに気づき、青クジラは激しく暴れ始めた。

それは本当に大暴れという言葉がふさわしく、身体を支えるために、私は電車のつり革のようにヒゲにつかまらなくてはならなかった。それで痛みを感じるのか、青クジラはさらに激しく暴れ始めたようだった。

ドンと突き上げるような衝撃を突然感じた。青クジラの腹の下にまわり、チビ介が思いっきり頭突きを食らわしたのだろうと思えた。『その人間を今すぐ吐き出せ』というつもりなのだろう。

だがそれは逆効果だったのかもしれない。おかげで青クジラは、私がチビ介にとって大切な存在であることに気がついてしまったのだろう。口を開けたままのしまりのない声だったが、意地悪そうにヒヒヒと笑ったような気がした。

潜水服のせいで閉じることができないといっても、青クジラの上アゴと下アゴの間が私が脱出できるほど開いていたというわけでは

ない。ほんのせまい隙間だったから、私は肩を通すことさえできなかった。青クジラが潜水を始めたのは、そのときのことだった。

アゴとアゴの間からものすごい勢いで水が入り込んできて、空気など一瞬でなくなってしまった。光もなくなり、真っ暗になってしまった。

きっと青クジラは得意満面でいたことだろう。水にもぐれば私を簡単に溺死^{できし}させてしまえると気づいてしまったのだ。だがその得意な顔も、数秒しか続かなかったに違いない。

もちろん私にはそれを目撃することはできなかった。後になってわかったことだが、チビ介は先回りをして青クジラの下方向行き、口を大きく開いて、相手のやわらかい腹部に噛み付いたのだ。

口の中においても、青クジラが痛みに身をよじるのが感じられた。このころになると竜騎兵部隊内でも検討され始めていたことが一つある。当初竜騎兵部隊は、海中での軽作業や偵察が主な任務と考えられていた。だがヒトリ海軍に続いてハマドラ力海軍や他の国々も竜騎兵部隊を創設するにいたっては、いずれ竜騎兵同士が海中で直接戦うという事態も想定しなくてはならなかった。だからクジラたちにも、他のクジラと戦う訓練が施^{ほこ}されるようになっていたのだ。

そうでなくても、チビ介のようなマッコウクジラは気の荒い攻撃的な動物として知られていた。深海には大王イカと呼ばれる巨大なイカが生息していて、全長18メートルほどにまで成長するのだが、野生のマッコウクジラはこれを主な食料にしているのだ。マッコウクジラは、生まれつきケンカ慣れしているといってもいい。それはあのとがったキバを見ればすぐにわかることだろう。

それに比べて、青クジラは小エビを食べるだけのおとなしい動物だ。私たちが出会った個体は特別に凶暴なやつだったが、本来青クジラはあまり攻撃に適した身体の作りにはなっていない。口の中にはすだれのようなヒゲが生えているばかりで、歯すら一本もないのだ。

チビ介のアゴがさらに強く青クジラの腹部を締め上げたようだった。苦しげに身体をねじり、青クジラは水面を目指した。

あつと気がついたときには、青クジラは海面に顔を出していた。水面を離れてロケットのように飛び上がり、そのまま棒高跳びの選手のように空中でくると一回転したのだ。もちろん次の瞬間には水面へむかって落ちていったのだが、そうやってチビ介のキバを振りほどこうという作戦だったらしい。

だがマツコウクジラのアゴの力を甘く見てはいけない。帆船時代、クジラ漁師たちは木製の小船でクジラに近寄り、手でモリを投げ込んでいた。そういう時、手負いのクジラから反撃を受けることもあったそう。特にマツコウクジラはそれが激しく、大きな身体で小船に体当たりをし、真っ二つにしてしまうどころか、口の中で噛み砕いて細かな木片に変えてしまうことまであったそう。そういう目にあつた漁師たちの運命は想像に難くない。

だからきつとチビ介も青クジラの腹部を放してしまうようなことはせず、ともにジャンプし、からみ合うようにして再び落下したのだろう。すさまじい水しぶきが上がったに違いない。

クジラの口の中に閉じ込められたまま水上高く飛び出し、その後落下するというのは、二度と経験したいようなことではない。私は目がまわり、潜水服にガンガンと何度もぶつけられることになった。

青クジラが水に落ちた瞬間、あることが起こった。青クジラは身体の右側を下にして落ちたのだが、すると当然、口の右側からは滝のような勢いで海水が流れ込んでくることになる。偶然だろうか、その流れが青クジラの口を上下に大きく押し広げることになったのだ。

気がついたときには、私は潜水服と一緒に海中にほうり出されていた。主のいない潜水服はすぐに沈んでいった。

だが青クジラは、私のことが憎くてたまらなかったらしい。チビ介を腹の下にぶら下げたまま全身の力を使って方向を変え、私に迫ってきたのだ。チビ介は、私が海中にほうり出されたことにまだ気づいてはいなかったのだろう。気づいていても、もちろん間に合わなかっただろうが。

だからあつと思つたときには、青クジラの巨大な身体が私めがけて突進してくるところだったのだ。もちろん私はよけようとした。そして半分成功した。

あのでかい頭に正面からぶつかられることは何とか避けることができた。だが私は、突然腹部ににぶい痛みを感じていた。

ケガや負傷による痛みではなかった。それはなんとなくわかっていたし、私の血が海水を赤く染め始めているわけでもなかった。青クジラに突き刺さっているあのモリに私の身体が引っかかっているだけだったのだ。まるで学校の体育の時間に鉄棒競技をするときのように、私の身体は前向きに二つ折りにされ、モリの柄に乗っかっているのだった。

私の手か足の先が水中からちらりとでも見えたのだろう。青クジラの腹の下を離れ、チビ介が駆け上がってくるのが目に入った。チビ介の身体が水面を突き破り、私のすぐ隣に並ぶのには何秒もかからないだろう。

青クジラが私をにらみつけていることに気がついた。もちろん私もにらみ返してやった。その瞬間、クサリにからみつかれていたあの白骨が再び目に入った。そして、その指に何かが輝いていることに気がついたのだ。

私がそれに手を伸ばすのを見て、青クジラの顔色が変わったような気がした。だがこのときにはチビ介が私の隣に浮上し、あいさつがわりだろうが、青クジラの横腹に向けて一発体当たりをかましたところだったのだ。青クジラは私の邪魔はしないことに決めたようだった。

白骨の指にあるものが小さな金の指輪であることに私は気がついた。やはり男物なのか大ぶりで、指のなかばにきちんとはまっているのだが、押さえつけているクサリを動かして指から引き抜くのは難しい仕事ではなかった。

指輪をポケットにしまい、私はモリを離れ、チビ介めがけてジャンプした。海中にドボンと落ちたが、すぐにチビ介が寄りそい、ベルトにつかまらせてくれた。

私をともない、チビ介はその場から泳ぎ去ろうとしていた。青クジラはすでに戦意を失っている様子だった。背中を水面に突き出し、バシユツと大きな音と水しぶきを立てて不機嫌そうに息を吐き出したが、それだけだった。もう私たちを追ってこようとはしなかった。

チビ介の身体につかまって現場を離れながら、何度もポケットの上から触れ、私は指輪がそこにあることを確かめないではいられなかった。

飛行艇たちがいる場所へはすぐに帰りつくことができた。さつきよりも飛行艇が一機増え、高速艇も姿を見せていた。その甲板に指揮官の姿を見つけ、私はチビ介を近寄せた。私は甲板へ上がることを許可されたが、すぐに困ったことに気がついた。

「ご苦労だったな、竜騎兵」アップル大尉は言った。「爆撃機は海底に着地したか？」

「はい」私は小さな声で答えた。水着のままなので、甲板にぼたぼた水をたらしている。

「では位置を教えてください。海図はどこだ？」

「それがその…」

「どうした？」

理由を正直に話すと、アップル大尉はあきれた顔をしたが、怒られたりはしなかった。脱ぎ捨てた潜水服と一緒に、海図はどこかの海の底なのだ。

「それとあの…」

「なんだ？ まだ何かあるのか？」司令部へ送る報告の電文をメモ帳の上で作りながら、アップル大尉はじろりと顔を上げた。ポケットから取り出し、私は指輪をみせた。細い金線でできていて、急流

の中の水草か、からみ合った森のツタのような形をした古めかしいものだ。小さな宝石もはめ込まれていたのかもしれないが、今では失われ、小さなカップのような台座の跡だけが残っている。

「これがその指輪です」

「青クジラの背にあつたやつか？ 古いものか？」

「そう思います」

「ふうん」大尉は退屈そうな顔をした。「オレはアンティークには興味はない。戦利品として、おまえがもらっておけ」

「はい、大尉」

それでも大体の数字ではあるが私は座標を覚えていたので、ヒトリ海軍は数日後には爆撃機を発見することができた。私の大洋横断訓練はそのまま中止されてしまったわけだが、爆撃機の追跡で同等の仕事をしたとみなされ、同級生たちと一緒に卒業することができた。スミス伍長ではなく、私はスミス少尉になったのだ。

私に言わせれば、海軍のお偉方たちがまたまたバカなアイディアを思いついたということなのだろう。正式の竜騎兵になって配属先が決まっても、私は同僚たちと顔を合わせることはなかった。直属の上司になる人が一度だけ書類を届けにきてくれたが、本当にそれだけだった。

そのかわり私は荷物をまとめ、両親や友人たちに別れを言い、ロツク諸島へ向かう客船に乗り込んだのだ。

ロツク諸島とは、ヒトリ本土の沖合い150キロのところにある小さな島々のかたまりだ。島民もいるが人口は300を超えず、ヤギを飼うことと漁業以外に産業はない。灯台があつて整備する要員もいるが、島が一つでも存在する限り、そのまわり200海里はヒトリの海になる。魚をとろうが何をしようが自由で、まったくそのためだけに存在しているような島だった。

だがここで、またあのハマダラカ国が登場する。何を考えているのか知らないが、最近このロツク諸島の近くでハマダラカのものらしい船舶が目撃されるようになっていたのだ。目撃者は島の漁師たちで、それがなんと潜水艦のシュノーケルが水上に突き出して走っているのを見たということだった。

水上を走る普通の船と同じように潜水艦にもエンジンがあり、乗組員もいて、新鮮な空気を常に必要としている。だから潜水中にも潜水艦はシュノーケルと呼ばれるパイプを頭上に突き出し、そこから水上のきれいな空気を取り込んでいるのだ。

漁師たちが目撃したのがこのシュノーケルらしいということなのだが、いささか信じられない話ではあった。こんな遠くまでやってきて、ハマダラカの潜水艦が何の用事があるというのだろう。何回か調査が行われていたが、ロック諸島のまわりでは役に立ちそうな鉱石層も石油も発見されず、漁場として以外には何の経済的メリットも見出せなかった。軍事的に見ても本土から離れすぎており、何の利用価値もないように思えたのだ。

だがそれでも、ひとり海軍が何の手も打たないというわけにはいかなかった。あちこちからさんざんつかれ、重い腰を上げる気になったのだ。しかし海軍もまじめに仕事をする気があったわけではない。何かをやったふりだけして、適当にお茶をにごすつもりでいたのだ。

そのにごし方というのが「最新の装備を整えた竜騎兵を一名島へ派遣し、パトロールと警戒にあたらせる」というものだった。そしてその仕事を命じられたのがこの私だったというわけだ。

私を乗せた客船は無事にロック諸島に到着したが、チビ介はいなかった。まだ訓練校にいて、明日、例の飛行艇に乗ってここへ運ばれてくることになっていた。

カバンを持って島の港に降り立ち、私はまわりを眺めた。島の風景は想像していたとおりのものだった。島全体が白っぽい色をした岩でできていて、太陽の光を浴びてまぶしく輝いている。仕事のためよりも、休暇を過ごすためにやってきたいような場所だ。

少しでも目立たなくするために、制服ではなく私服を着ていくようにと私は言われていた。私は、島に一軒しかない宿屋に宿泊することになっていた。船着場から山へ向かって通りを一本入ったところ

るにあり、小さな二階建ての建物だった。

経営者の名はヒルといい、やせた中年の小男だが、気さくで親切そうな感じなので、一目見ただけで私は好きになった。若いころはこの人も漁師をしていたらしいが、ある事故で身体を悪くし、やむなく陸に上がって、この宿屋を始めたのだそうだった。観光地とはいえないが、釣り好きな人々の間ではよく知られた島なので、常に何人かが宿泊していて、私もその中に混じることになった。

島に着いたのは朝早くのことだったので、昼食をすませた後、私は散歩に出かけることにした。

驚いたことに、この島は二時間もあれば歩いて一周できるほどの大きさしかなかった。散歩の結果わかったのは、小高い山が中央に一つあるが、それ以外は町が一つとあとはオリーブや松の森がチョロチョロとあるだけのちっけな岩の塊でしかないということだった。

翌日、島にチビ介が到着した。小さなボートを借りて海に出て、私は待ちかまえていた。

大きな音と水しぶきを立てて、飛行艇は着水した。後部のハッチが開き、チビ介は海の中におどりでた。すぐに私を見つけ、鼻を押し付けてくるので、ボートがゆらゆらと揺れるほどだった。

私がボートをこぎ始めると、もちろんチビ介はついてきた。島のはずれに今は使われていないボート小屋があり、私はそれを借り受けていた。以前は漁船が入られていたものだが、内部は広々としていて、チビ介でも身体を伸ばすことができた。すでに私の潜水服も運び込まれ、小型のクレーンや潜水服の整備に使う道具類も備え

付けられていた。これから何ヶ月かの間、ここが私の活動拠点になるわけだった。

きちんと時間を決めていたわけではないが、午前と午後の二回、私はチビ介を連れて海に潜ることにしていた。海図は渡されていたが、海底の地形について詳しいものではなかったので、自分で少しずつ書き加えていった。

島と同じように、このあたりの海底も一面が白っぽい岩でできていた。平らな岩床がどこまでも続いている。

『潜水艦』を目撃したのは5日目のことだった。海に潜っていないときには目撃者たちを訪ね、私は話を聞いてまわっていた。その結果わかったのは、もし本当にハマダラカの潜水艦であるとすれば、おそらくローレライ型潜水艦だろうということだった。漁師の一人の言葉が決め手になったのだ。

「あの潜水艦には、へさきの部分に小さな羽根のようなものがあつたよ」

この漁師は真夜中、明かりを消して海面に浮上していた真っ黒な潜水艦ともう少して衝突してしまうところで、あわてて自分の船のかじを切りながら、航行灯を反射して相手の姿がざらりと光るのを見たのだそうだった。

へさきに小さな翼のようなものがあるということから、私はすぐにローレライ型潜水艦を連想したのだ。

ローレライ潜水艦は、ハマダラカが竜騎兵の輸送や支援に用いているものだった。クジラを出し入れするために、へさきがワニの口

のように大きく開くように作られている。そのせいでへさが重く複雑な形になり、安定性が失われたのでこの小さな水中翼を追加したのだろうとヒトリ海軍内部では解釈されていた。最新型の潜水艦ではなく、足も遅いが、航続距離の長い面倒な相手ではあった。

だが一つだけいいことがある。航続距離を伸ばすために燃料タンクを大きく取ったので、もともと広くもない船内はさらに余裕がなくなり、クジラは一頭しか積み込むことができないのだった。

漁師たちの話から、この海域にいる敵潜水艦は一隻だけだと思われた。ということは、このあたりにいる竜騎兵は私を含めても二人だけだということになる。

そのローレイを、私はこの島へ来て五日目の夜に目撃したのだ。島の裏側には町が存在せず、住民も家もまったくなかった。小さな岬があり、ナイフのようにとがって海に突き出し、よい目印になった。そこが合流地点としてあらかじめ決めてあったのだろう。浮力を調整してローレイは水中にたたずみ、待機していたのだ。

夜の海中なのだから、もちろんその姿など見えはしない。だがローレイは船体の下部に強力なライトを備えていて、まるで灯台のようにゆっくりと点滅させていた。

このライトはカバーをかけて、水上からは光が見えないようにしてあったが、水中にいる私とチビ介にはもちろん見ることができた。300メートル離れていても目に入るほどで、味方の竜騎兵を呼び寄せるための目印なのだろう。ということはハマダラカは、ヒトリがこの島に竜騎兵を配置したことをまだ知らないのかもしれないのかもしれない。

水中に身を隠したまま、チビ介と私は待ち続けた。あの潜水艦はソナーを使用しているに違いないから、音を立てるわけにはいかなかった。熟練したソナー手は、クジラの鳴き声もすぐ聞きつけてしまっただろう。もちろんチビ介はむやみに鳴かないように訓練されているが、泳ぐときに立てる水音までは防ぎようがない。

私は腕時計をのぞき込んだ。さっきチビ介が水面で息を吸ってから15分たっている。次の呼吸は1時間45分後だ。それまではここに潜み続けることができる。チビ介を海底に腹ばいにさせ、私はそばに寄りそい、耳をすませた。

何かが接近しつつあるとチビ介が教えてくれたのは、1時間後のことだった。そっと胸びれを伸ばし、私の腕に触れたのだ。

私は顔を上げ、前方を見透かそうとした。潜水艦は同じ場所にて、ライトも同じように輝き続けている。だが突然、その光の手前を何かが横切るのが目に入った。

チビ介の胸びれにそっと触れ返し、私は前方を見つめ続けた。しかしそれ以上は何も見ることができなかった。そのかわり、ごく小さく低いモーターの音が聞こえはじめた。きつとローレライが船首のハッチを開こうとしているのだろう。そして竜騎兵とクジラを収容したのか、再びハッチが閉じる気配があり、すうっとライトが消え、海の中は真っ暗になってしまった。

敵の竜騎兵の姿を私がこの目で直接見ることになったのは、二日後のことだった。昼間の海を泳いでいたのだが、突然チビ介が立ち止まり、ヒレを動かすのをぴたりとやめたのだ。何だろうと思って瞳をのぞき込んだのだが、次にチビ介は、身体を動かさないままでゆっくりと海底へむかって沈み始めるではないか。もちろん私も一緒に降下してゆくことになる。

海底に着き、チビ介は海草の中に身を隠した。私も同じようにし、チビ介の隣に腹ばいになった。

チビ介は、聴覚が特別鋭いようだった。考えてみれば私との出会いもそうで、ゼノンが歌う歌を聴きつけ、きつと何キロも離れたところにいたのだろうが、好奇心に駆られてやってきたことがきっかけだったのだ。

それ以来機会があることに注意してみるようになったのだが、竜騎兵部隊にいるほかのクジラたちと比べても、チビ介の耳は並外れて優れているようだった。あるときなど、一度耳にした船の音もチビ介は絶対に忘れることがなく、それどころか敵と味方の区別まできちんとつけて記憶しているのではないかという気までしてきたほどだった。

何も疑う気にならず、私はチビ介の隣に身を横たえ続けた。だが何も起こらない。耳をすませ続けたが、何も聞こえはしなかった。

目の前の海底の砂地に、突然小さな力二が現れた。細長い手足があり、イチゴのように赤い色をしたきれいな力二だ。だが何を思っ

たのか、私の身体の上に登り始めるではないか。じっと動かずにいる私を岩と間違えたのかもしれない。

そつと手を伸ばし、潜水服から払い落とそうとしたのだが、そのとき何かの影が目に入ったので、私の手は動かされないままになった。

数十メートルの距離があり、細かいところまでは見えなかったが、水中を行く人影だった。明らかに竜騎兵で、私と同じように潜水服を身につけている。チビ介よりは小型だがクジラを引き連れ、特に緊張した様子もなく、のんびりと泳いでいる。

クジラの種類は見間違いようがなかった。シャチだ。

クジラの種類で、黒い身体に白い模様がいくつかある。飼いならすことは可能だが、あまりにも気が荒いので、ヒトリの竜騎兵部隊では一頭も飼育してはいなかった。

あのシャチの背中からも、もちろんチビ介と同じように空気パイプが伸びているのが見える。そして、シャチを使っている竜騎兵といえはこの世に一つしかなかった。ハマダラカ海軍だ。

シャチの姿を見て、私はチビ介の行動の意味が理解できたような気がした。シャチは肉食動物で、クジラを襲うことがあり、あまり顔を合わせたい相手ではないのだろう。海草の中に隠れてやり過ごすことができれば、それに越したことはないのだろう。

チビ介と一緒に身を潜めながら、私は眺め続けた。ハマダラカ竜騎兵が手に大きな海図を持っていることに気がついた。ヒトリ海軍が用いているものと同じように防水紙で作られ、念のためさらに金

属製のケースに収められている。

海図にチラチラと目を落としながら、ハマダラカ兵は何かを探している様子だった。さかんにキョロキョロして海底を眺め、ときどきシャチを立ち止まらせる。だがお目当てのものがどうしても見つからず、いかにも当惑しているという感じがした。潜水服を着ていなければ、頭をぼりぼりとかいているところだろう。

何を探しているのだろうと、私は想像をめぐらせ始めた。その後、も何分間かハマダラカ兵は成果のない搜索を続けていたが、やがてあきらめ、どこかへ姿を消してしまった。

宿屋の食堂で食事をしながら、私は考えごとをしていた。

ついさっき島の郵便局を訪ね、司令部に向けて電報を打ったところだった。あて先は個人名にしておいたし、暗号を使った電文なので、途中で誰かが盗み読んでも、何でもない普通の通信文にしか見えないだろう。私は、漁師たちの噂話が真実であること、ハマダラカのローレライ潜水艦と竜騎兵を目撃したことを連絡しておいたのだ。

「どうした？ 何を考え込んでいるんだね」

突然話しかけられ、私は顔を上げた。ヒルが私のカップにコーヒ―をついでくれようとしていた。もちろんヒルは私が竜騎兵であることを知っており、身元もしっかりした人物のようだった。だから海軍も信用して、私をここに宿泊させているのだろう。そうになると、この島の中で信用できるのはこの人ひとりであるような気がしてきた。

まわりのテーブルを見回したが、いるのは私一人で、誰かに話を聞かれる心配はなかった。

「あのね」私は話し始めた。「詳しいことは話せないのだけど、変な連中がこの島のまわりをうろろしているのは事実なの。ただその連中が何をねらい、何をしようとしているのかがわからない」

「それはつまり」咳^{せき}払いをし、ヒルはイスの一つに腰かけた。「スパイのような連中かね？」

「まあそんなものね」私は微笑んだ。

「ふうん、スパイねえ。しかし探る値打ちのある秘密が、こんなちやちな島にあるものだろうかねえ」

「海軍の秘密基地なんかはないわよ。私が教えられていないだけかもしれないけれど」

「基地なんかがあれば」ヒルは笑った。「島全体が軍人の姿であふれて、この店も大繁盛するんだがね」

「そうね」

「そういえば以前、オレがまだ子供だったころだが、この島が人でいっぱいになったことがあったよ」

「どうして？」

「島の連中は冗談交じりにゴールドラッシュと呼んでいたがね。この島のどこかに海賊の金塊が隠されているという噂が立ったことがあるのさ」

「金塊？」

「海賊スパークって知っているかい？」

「名前だけは聞いたことがあるような気がするわ」

「一時期、ヒトリの海を荒らしまわっていた男さ。まだ帆船の時代

だったが、子分を引き連れて船をおそい、金目の物をこっそり奪い、乗っていた者は海に突き落とし、船は火をつけて燃やした。そうやって10年以上悪事を続けたのだが、ついに捕まってギロチンにかけられた。その隠れ家も発見され、搜索されたが、どこに隠したのか財宝などコイン一枚見つからなかった」

「それがこの島のどこかに隠されているというの？」

「そうらしい。噂が広まり、何百人もがこの島に押し寄せた。手に手にスコップを持ってね」

「でも財宝は見つからなかったのね」

「そうさ。埋まっているかどうかあやしいとオレは思うがね」

「隠し場所の手がかりはないの？」

「何もなかった。だからゴールドハンターたちは、島中をあてずっぽうに掘り返したものだ。もちろん何も出てきはしない。騒ぎは3ヶ月ばかり続いたかな。そのうちにあきらめて、みなどこかへ行ってしまったよ」

「本当に何の手がかりもなかったの？」

私がそう言うとヒルは見つめ返し、さもおかしそくに笑った。

「それについても、噂はあることはあった。なんでもスパーク船長は、宝の隠し場所を解く暗号を金の指輪にきざみつけていたというのだよ。そして、その指輪をどこに隠したと思うね？」

「さあ？」

「ただの作り話だとしてもひどい話さ。スパーク船長は子分の腕を切り取り、指にその指輪をはめさせ、クサリで縛り付けて、クジラの背中にモリごと打ち込んだのだとさ。だが何十年も前のことだ。本当のことだったとしても、そのクジラはとくに死んでいるさ。財宝の隠し場所を記した指輪は今ごろ、クジラの骨と一緒に広い海のどこかに沈んでいるに違いないとオレは思うね」

きっかけはまったく偶然の出来事だった。ある日の夕食ときにヒルの漁師仲間たちが店に集まり、なんとなく昔話が始まったのだ。この島の古い時代の漁業に関する事で、当然ヒルがまだ漁師をしていたころのことも含まれていた。そのうちに一人が言ったのだ。

「ヒル、あの写真をもってこいよ」

ヒルはすぐに応じた。奥の部屋へ姿を消したが、額に入った写真を持って戻ってきた。横長の大きなもので、大切そうにしている。仲間たちがいるテーブルの中央に置いた。

私も少しのぞき込んだ、古い写真で、小さな漁船が写っている。島の近海で撮影されたもので、ヒルを含めて数人の漁師が甲板の上に並んでいる。これが若い時代のヒルだと指さされて、私は「へえ」と思った。今と同じように小柄だが若々しく、リスのようにすばしっこい感じがする。今と違ってヒゲを生やしていないのが少し変な感じだ。

「ふうん…」私は何か言おうとした。だが言葉はそこで消えてしまった。私は、写真の背景に写っている物に目を奪われていたのだ。

昔話に夢中で、男たちは私の様子には気がついていなかっただろう。彼らの話し声に負けないように、私は少し大きな声を出した。「ねえ、ここに写っている岩は、ずいぶんおかしい形をしているのね。三角形をして、まるで三つ子みたいに仲良く並んでいるわ」

ヒルが振り返った。「ああ、それは三角岩というのさ。奇妙な眺

めだろう？ でも、それがどうかしたのかい？」

「うっん」私は首を横に振った。「ちょっと変わっていると思った
だけよ。この岩は今でもあるの？」

「あるとも。岩の形なんて、何十年たつても変わるもんじゃないか
らね」

「どこにあるの？ 見にいつてみたいわ」

ヒルと男たちは笑い始めた。「物好きなもんだねえ。行っても何
もありはしないよ。釣り場でもないしな」

それでも男たちは、三角岩のある場所とそこへ行く方法を教えて
くれた。きちんと記憶するために私はひどくまじめな顔をしていた
に違いないが、少しアルコールが入り始めている男たちは何も気が
つかなかったようだ。ヒルだけは少し不思議そうな顔をしていたが、
何も言わなかった。

この夜、私はなかなか寝付くことができなかった。三角岩のこと
ばかりが頭に浮かんた。食堂から部屋に戻ってきて、すぐに私物を
引っかきまわし、私はスパーク船長の指輪を引っ張り出していた。

この指輪は金線を編んで作ったようなデザインで、網のように透
けており、目の前へ持つていくとそのむこうの景色が透けて見える。
表面の模様はさらさらとして水草のようなのだが、その中に似つか
わしくない三角形が3つなぜか刻み込まれていることに私は気がつ
いていたのだ。さつき写真で見た3つの岩とよく似たほぼ正三角形
の形だ。あの岩とこの指輪の間には何か関係があるのではないかと
いう気がした。

翌朝目が覚めると、すぐに私は出かけた。水の上での仕事だから、チビ介を連れていくわけにはいかなかった。小さなボートに乗り、私は一人で海へこぎ出た。

波は静かで、ボートをこぐのは難しくなかった。海岸線に沿って、私は進んでいった。白い岩でできた島は、朝日の下できらきら輝いている。

漁師たちが言っていた場所に近づくと、三角岩が見えてきた。岩たちは互いに50メートルばかり離れているので、まるで舞台の上の俳優のように、一人ずつ私の前へ現れてあいさつでもしてくれている感じだ。

もちろん私はすぐに指輪を取り出した。目の前にかざし、例の3つの模様と、遠くに見えている岩たちをぴったりと重ねてみようとしたのだ。

だが、なかなかうまくいかなかった。ボートが波でゆらゆら揺れるせいもあったが、しばらく無駄な努力を続けて、どうやら自分のいる位置が悪いせいだとやっと気がついた。どこか正しい場所に立てば、きっとあの岩と指輪の模様をぴったり重ねることができないという気がした。

それはどこなのだろう。指輪をしまい、私は海の上をキョロキョロ見回した。

この島の海岸線は岩だらけで、砂浜などほんの少ししかない。こも例外ではなく、岩だらけの水ぎわはノコギリの刃のようにギザギザしている。それだけではなく、陸上から転がり落ちてきた岩も

たくさんあり、水中に取り残されて、ザバンザバンと波を浴び続けている。

その何十メートルか沖合いにも岩の塊がいくつもあり、少し途切れ途切れではあるが、まるで恐竜のしっぽのように長く伸びている。あの岩の上に立てば、私が探している場所も見つかるのではないかという気がした。

ボートをつけるのに少し苦労した。それでも最後には岩の上に上陸し、ボートのロープもきちんと結びつけることができた。

岩の上を歩き回り、求める場所を見つけるのに長い時間はかからなかった。縦横１メートルほどしかないせまいものだが、なんとなく平らになった場所があり、そこに立って指輪を取り出すと、まさにそのとおりだったのだ。岩と指輪の模様を三つともぴたりと重ねることができ、ここがその場所に違いないと思った。

だが私は、少し当惑を感じてもいた。スパーク船長が意図した場所がここだというのは間違いないだろう。でも肝心の財宝はどこに隠されている？

もちろん私は自分の足元を眺めた。しかし巨大な固い岩盤にすぎず、穴を掘ることなどとてもできそうにない。何かの道具を使ってなんとか穴を開けたとしても、それを埋め戻したような跡も見られない。私はわけがわからなくなってしまった。

私は岩の上に座り込んだ。ひとけのない島の裏側だが、もし私を見ている人がいたら、何をしているのだろうときつといぶかしんだことだろう。

がっかりして、私は岩の上に座り込んでいた。まわり中に波が押し寄せ、音を立てている。まるで演奏会の前に楽団の演奏者たちが思い思いに楽器のチューニングをしているかのような感じた。私はその真っただ中にいた。

だが、いつまでここにも仕方がない。私は宿屋へ帰ることにした。立ち上がり、最後にもう一度というつもりで指輪を取り出し、目に当てた。

指輪の模様と3つの岩はたしかに一致している。今では失われてしまっているが、飾られていた宝石がまだあれば、その眺めに興をそえてくれることだろう。どんな色の宝石だったのかは知らないが、台座に座って輝き…

突然私は気がついた。その宝石の位置が財宝の隠し場所を示していたのではないか？

指輪から宝石は失われてしまっている。だが台座の跡は残っているから、宝石があつた場所は今でもちゃんと知ることができる。

片目だけを使って、私は指輪を透かし見続けた。だが困ったことに、宝石の台座は陸上を示しているではなかった。何度見直しても水中の一点を指しているだけなのだ。

私の真向かいには大きな白い岩の壁があり、その水面下の部分を示しているのだ。きつと水深十メートルほどのあたりだろう。しかし、あんな場所に財宝が隠されていたりするものだろうか。本や物語によくあるように、財宝というのは陸上のどこかに穴を掘って埋められているものだとばかり思っていたのだが。

だがこういう結果なのだから仕方がない。あまり気は進まなかったが、私は水中のあの地点を調べてみることにした。しかし今日はもう無理だろう。すでにかなり疲労しているし、午後にはチビ介の様子を見にいかなくてはならない。

私がああ白い岩壁の下を調べることができたのは、翌日のことだった。朝早く宿を出て、私は船小屋へ向かった。だがささいだが、奇妙な出来事にこのとき出くわしたのだ。

私は船小屋の扉を開こうとしていた。南京錠があるのだが、キーを差し込もうとして、足元に小さなコインが落ちていることに気がついたのだ。

もちろん私は拾い上げた。本当に小さく、親指の先ほどしかないものだが、色から見て間違いなく金貨だろう。古びているので模様は消えかかっているが、何とか年号は読むことができた。

驚いたのは、それが200年も前のものだったことだ。汽船も飛行機も存在せず、海の上には帆船しか走っていなかった時代だ。

誰が落としたコインなのか、見当もつかなかった。船小屋はひとけのない場所にあり、そばには家などもなく、見回しても人影一つ目に入らなかった。コインをポケットに入れ、私は小屋の扉を開けた。水面から顔を出し、噴水のように水をピュッと噴き出して、すぐにチビ介が迎えてくれた。

そのあと潜水服を身につけ、私はいつものようにチビ介を連れて出かけたのだ。だが途中で道に迷い、現場についたのは日が高くなつてからだった。

チビ介を立ち止まらせ、背中に登って波の上に顔を突き出し、私は眺めた。たしかに昨日と同じ場所だ。三角形の岩が3つ見えるし、あの岩壁も真正面にある。岩に接触してチビ介がケガをしないように気をつけながら、ゆっくりと前進を始めた。

波打ち際ではあるが岩壁の前は水深が深く、波も静かだった。思っていたよりも簡単にチビ介を進めることができた。

水の上と同じように、岩壁は水中にも深くまっすぐ伸びていた。まるで窓のない巨大なビル壁のような感じだ。近くへ行き、そっと手を触れることだってできそうな気がする。

一番底の部分で、岩壁と海底は直角に交わっている。見下ろすとその近くに小さな洞窟のようなものが口を開けていることに気がつき、私ははっと息をのんだ。

岩の性質のせいで、この島には天然の洞窟がいくつもあるという話は私も聞いていた。その一つがあそこにも口を開けているということなのだろう。いつからあるのかは知らないが、人類が生まれる前から存在しているのは間違いないだろう。

チビ介に合図を送り、私はさらに深く潜らせた。波が岩にぶつかる音がドオンドオンと太鼓たいこのように聞こえ続けている。見上げると、岩場に沿って白い泡が、カーテンのように見渡す限りどこまでも続いている。

チビ介は降下を続け、私たちは洞窟の内部をのぞき込むことができる場所までやってきた。洞窟の中は暗く、ほとんど何も見えなかった。手を伸ばし、私は懐中電灯のスイッチを入れた。

黄色い光が、さつと洞窟の中を照らした。だがそこに浮かび上がったものは、私の予想とはまったく違っていた。

最初に見えたのは、崩れてほとんど洞窟をふさいでしまっている何百もの岩のカケラだった。大きいのも小さいのものもあるが、大きなカケラは馬の胴体ほどもあり、とても私の力では動かすことができないだろう。割れ目はギザギザして新しく、海草やサンゴのたぐいも生えてはいない。ごく最近崩れたものなのだろう。

懐中電灯を動かし、もう一度眺め直したが、やはり洞窟は完全にうずまってしまっている。だがその次に目についたのは、もっと奇妙なものだった。大きなシャチが一匹、洞窟の床に長々と横たわっているのだ。その背中に金属製の長い空気パイプが接続されているのが見える。

チビ介がビクンと緊張するのが感じられたが、私は頬に触れて落ち着かせた。やはりシャチは身動き一つしない。

シャチの背中から伸びた空気パイプは、岩のガレキの下に消えている。うずまってしまって、その先がどうなっているのかはわからない。だが決まっているではないか。あのパイプの先にはハマダラカの竜騎兵がいるに違いない。この洞窟の内部を調べていたときに、突然の岩崩れに襲われてしまったのだろう。岩の下敷きになって、逃げるところか身動きも取れなくなってしまうているのだ。あるいはすでに死んでいるのかもしれないが、確かめる方法はなかった。

チビ介から離れ、私はそつとシャチに近寄った。パイプが岩の下敷きになったことで、こいつも身動きができなくなっているのだ。肺の中の空気を使いきり、もう死んでしまっているかもしれない。

心臓の鼓動を確かめたくても、私の潜水服はそういう繊細な仕事ができるようには作られていない。シャチの胸のあたりにそつと触れてみたが、鼓動を感じ取ることを期待していたわけではない。だが、かすかだがシャチが目を開いたではないか。ひどく弱々しいが、まだたしかに生きているのだ。

急いで水面へむかえという指示を突然出されて、チビ介は驚いていたかもしれない。だがちゃんということを聞いてくれた。水面へ行き、波の上に呼吸口を出させ、私は精一杯息を吸わせ始めた。イビキのような音を立てて、チビ介は勢いよく空気の出し入れを始めた。

陸上の動物よりも多くの酸素をクジラは血液の中にたくわえることができる。潜水中には、必要な臓器の代謝をぎりぎりまで抑えることもできる。そうやってクジラやイルカは、水中に長くとどまることができるのだ。

チビ介が空気を吸い続けている間に、私は潜水服を脱ぎにかかっていた。後のことなど気にせず、ぽんぽんネジを外していった。空気パイプは、チビ介の背中からすでに引き抜いてやっている。潜水服を水中に投げ捨て、ベルトにつかまり、再び「潜水せよ」という指示を私はチビ介に与えたのだ。

さつきと同じ場所で、シャチは同じ様子で横たわっていた。私が背中に取り付くと再びかすかに目を開けたが、それ以上の反応はなかった。

敵国ではあるが、ハマダラカの竜騎兵部隊で使われている接続装置の操作方法は私も学んでいた。何も迷わずに、シャチの背中から空気パイプを外してやることができた。

気がつかないのか、シャチは数秒間何の動きも見せなかった。私が背中をパシンとたたいてやると、自由になったことにやっと気づき、最後の力を振り絞って水面へむかって泳ぎ始めた。そうやって何十分ぶりの空気を吸うことができたのだろうが、見送っている暇は私にはなかった。ハマダラカ兵の空気パイプを手にしたまま、合図をしてチビ介を呼び寄せたのだ。

チビ介はおとなしくいうことを聞いた。岩崩れのすぐそばまでやってきて、海底に腹ばいになったのだ。手にしていたパイプを、私はチビ介の背中 of 接続装置にパチンとつないだ。コックを開くと、岩の向こうにいるはずの竜騎兵にむかって空気の供給が始まったはずだ。まだ生きていればだが。

「何をしているのだろう」とチビ介が不思議そうな顔で見ているような気がしたが、もう何をする余裕も私にはなかった。私の息もすでにつきかけていたのだ。

海底をけり、私は水面を目指した。水面に顔を出せてほっとしたが、シャチの姿はもうどこにも見えなかった。あれだけの目にあつたのだ。あのシャチが二度と人間には近づかないことに決めたとしても、私は責める気にはならなかった。

それはそうと、岩の下のハマダラカ兵とチビ介のことだ。チビ介は二時間息を止めたままでいられるから急ぐ必要はないといっても、やはりあせりを感じないではいられなかった。

水面を泳ぎはじめ、私は岸へ向かった。岩だらけの海岸だから上陸できる場所を探すのに少し手間だったが、とうとう上陸することができた。両手で岩の出っ張りに取り付き、自分の身体を引き上げ

ただ。ありがたいことに、すぐ向こうに小道が見えている。それを目指して私は駆け出した。

ひとけのないあたりだが、幸いにもすぐに人の姿を見つけることができた。オリーブ畑があり、木の世話をしている男の姿を見つけたのだ。ハシゴをかけて枝に取り付き、ハサミを手に何かをしている。すぐそばの塀に自転車が立てかけてあることに気がついた。

「おじいさん」

駆けていきながら、私は精一杯大きな声を出した。

男は頭がはげ、ヒゲも真っ白になっていたが、私の声を聞きつけて振り向いた。私の水着姿に驚いた様子だったが、胸に描かれている海軍のマークにすぐに気がついたようだ。

「何だね、軍人さん」

「緊急事態なの。その自転車を貸して。岩崩れが起きて人が下敷きになった。町から人を呼んでこなくちゃならないわ」

「それはどこで起こったんだね？」

「この下の海岸よ。おじいさんには見つけられない場所だわ。じゃあ自転車を貸してね」

「ああ、それはかまわんが…」

老人の言葉を最後まで聞かずに、私はハンドルに手を伸ばしていた。車体の向きを変えてさっとまたがり、坂道を駆け下っていった。

帆船の時代にはこの島は重要な航路の中継基地であり、嵐のとき

の待避所でもあった。町は小さな入り江に面していて、山の影のくぼみのような場所にある。ずっと下り坂が続く、私はほとんどペダルをこぐ必要がないほどだった。

自転車と一緒に、私は町の中へ駆け込んでいった。大きな音を立ててブレーキをかけ、自転車をほうり出し、私はヒルの宿屋の正面玄関へ飛び込んだ。

もうすぐ昼食時で、まだ料理は出されていないが、食堂には人が集まり始めていた。その中へ私は水着姿で飛び込んでいったのだ。ひどくあわてた様子で大声を出し、早口で事情を伝えようとする私の姿はなかなかの見物だったと思う。ヒルもすぐに調理場から出てきたが、飲み込みの早い男だったのはありがたかった。

三十分後には、救難隊が港を出発していた。この島は日当たりがよく、島のまわりを浅い海底が取り巻いていたので海綿かいめんの生育に適していた。化粧や入浴などに使うスポンジのことだが、現在ではかなりプラスチックの物にとってかわられたといっても、天然物独特の風合いは捨てがたく、愛用している人も多い。だからこの島でも、海綿の採集が今でも行われていたのだ。

採集には、簡単な構造の潜水服のようなものを用いる。ガラス製の金魚バチのようなものに空気パイプを取り付け、これを頭にかぶって潜水するのだ。潜水者の頭上には船が待機し、甲板の上では空気ポンプがゴトゴトと動き、その空気パイプを通して海中に空気を送るのだ。こういう船がこの島には数隻いて、しかもその一隻が、運良くちょうど出港準備が整ったところだったのだ。

救難隊といってもこの船ともう一隻、連絡用の小船という陣容でしかなかったが、小さな島ではこれで精一杯だった。アクセルを全

開にし、波をけたてて現場へ急いだ。

白い岩壁が正面に近づいてくると、たまらなくなつて私は海に飛び込んだ。まだ少し距離があつたが、洞窟を目指して進んだ。

もちろんチビ介はそこにいた。特に何も起こつた様子はなく、すぐに私を見つけて目玉を動かした。身動きをさせないように、私は目の下をなでてやった。

できるだけ岩壁に近づかなくてはならないが、衝突するわけにはいかない。船の連中は操船に苦勞しているようだった。だがなんとか目的を達したようだ。マストの一本を取りはずし、つかい棒代わりに岩壁に押し当て、船を固定することに成功したのだ。

検査コックと呼ばれるのだが、チビ介の接続装置にはごく小さなつまみがあり、これをひねると小さな穴から空気が噴き出すようになっていゝる。本来、空気がちゃんと流れているかどうかを確認するためのものだが、私はときどきそれを開き、コックに口をつけて息を吸い込んだ。そうやって海中で待機していたのだ。

船上の空気ポンプがすでに始動していることを私は知っていた。やがて人影が船から海に飛び込むのが見え、漁師の一人だったが、空気ホースを手に私のほうへ泳いでくる姿が目に入った。

「何をやっているのだろう」という顔で、チビ介は私たちを見つめている。漁師の手からホースを受け取り、私は調べた。

うまくいきそう。口径もつなぎ目の形もうまくあっている。パイプを引き抜いて、私はチビ介を自由にしてみた。そこへすかさず漁師がホースを差し出した。二人で力をあわせて、これをハマダ

ラカ兵のパイプに接続したのだ。接続がうまくいった瞬間、手のひらに伝わってくるカチンという振動がいに快く思えたことが。

大きな身体をすり寄せてくるので、私は背中に乗って、チビ介をなでてやらなくてはならなかった。息を吸うために、漁師はもう水面へむかって泳ぎ始めている。同じようにしようと、私もチビ介に指示を出した。チビ介は了解し、私の乗せたまま尾びれを動かした。すぐに漁師など追い越してしまい、私たちは波の上にざあっと姿を現すことになった。

うまくいったという意味で私が手を振ると、漁師たちも手をたたいてくれた。縄ばしごを降ろして、やっと水面に顔を出した仲間を引き上げにかかった。

本土から応援が到着したのは、夕方近くのことだった。必要な機械や道具類と潜水夫を積んだ高速艇で、すぐに私は任を解かれ、宿屋へ帰って休むことを許された。今回も指揮官はアップル大尉だったが、島の町役場の中に臨時に作られた指揮所を離れる直前、私は質問してみた。

「アップル大尉」

司令部から届いたばかりの電文に目を通しているところだったが、大尉はすぐに顔を上げた。「どうした？」

「あの竜騎兵は生きていますでしょうか？」

「さあな」大尉は机に頬杖ほおづえをついた。「よくわからんが、漁師たちの話では、ポンプで送り込んでいる空気がパイプの先のどこかでわずかず消費されているのは確かだということだ。それが誰かが呼吸しているせいなのか、単にどこから空気漏れを起こしているだけなのかはわからんが」

そのあと私はすぐに宿屋へ帰ったのだが、疲れていたこともあって、肝心なことをすっかり忘れていたのだ。夕食をすませ、6時ごろにはベッドに入ったのだが、突然思い出し、真夜中に目が覚めた。あわてて時計を見ると、十一時を三十分すぎたところだった。ベッドを抜け出し、大急ぎで服を着、階段を駆け下りていった。

まだ指揮所にいたので、アップル大尉はすぐに見つけることができた。無線機で誰かと話していたが、私に気づいて顔を上げた。「どうした、スミス」

「すみません。忘れていました。いま思い出したんです」

「何を？」

「今すぐ出発すれば、ローレライ潜水艦をつかまえることができる
かもしれません」

「なんだって？」

私は説明を始めた。島の裏側に小さな岬があり、とがった姿が合流地点のよい目印になること。その場所で真夜中、ローレライを見かけたこと。ローレライはライトをともし、へさきにある入口から竜騎兵とクジラを収容したと思われること。

「ふうん」アップル大尉は口をゆがめ、下を向いて頬杖をついた。

私の言ったことがいかにも気に入らないという表情だ。仕事が増えるのがいやなのだろう。だがとうとう目を上げ、私をじろりと見た。
「おまえの身体は大丈夫か？ 疲れは取れたのか？」

「はい、大丈夫です」

「よし、ついて来い。とにかく人手がたりん」大尉は立ち上がった。

「ハマダラカの竜騎兵はどうなったんですか？」

「潜水夫が潜って、岩を一つずつ取り除いているところだ。手作業だからなかなかかはかどらんが、やつの身体は見えてきた」

「生きていますか？」

事情を記したメモをびつくりした顔の秘書に押し付け、指揮所を出ながら、大尉はうなずいた。「意識はないが、呼吸はしている。とにかく早く収容したい」

通りに出て、私たちはヒルの宿屋へむかって歩き始めた。私は口を開いた。

「ローレライはどうするんですか？」

「人手がないから、オレとおまえの二人で何とかするしかない。ヒルや漁師たちも協力はしてくれるだろうが」

真夜中の町は暗く、月と星以外に明かりはない。通りの左右にある家々は真つ黒に見え、細かい部分がわからないから、黒い石でできた四角い箱だといわれてもそのまま信じることができそうだった。舗装のない道に、私と大尉の足音が響いていた。

不本意ながら私たちは、ヒルや漁師たちをベッドからたたき起こす形になってしまった。だがすぐに協力が得られ、エンジンをかけ、私たちは三十分後には漁船に乗り、港を出発することができた。甲板の上で温かい風を浴びながら、私はもう一度事情を説明した。

「その岬なら知っているよ」ヒルが言った。「あの岬の先で海底がストンと深くなっているから、潜水艦が隠れるには好都合だろうな」

「どのくらいの大きさのある潜水艦なんだね？」漁師の一人が言った。

「40メートルぐらいかな。本当にずんぐりしたハマキのような形だ」アップル大尉が答えた。

「そいつをどうやって捕まえるんだね？」

「それを悩んでいるのさ」

「言つとくが、これはただの漁船だからな。武器なんぞ一つも積んどらんぞ」

岬が近づいてくるとエンジンを止め、私たちは帆を上げた。古い時代の船には、帆とエンジンの両方を備えているものがあつたのだ。

風を受けてゆっくりとではあるが、船はほとんど音を立てずに前進することができた。それでも私は、なんとなく声をひそめて話さないではいられなかった。いくらソナーを備えているといっても、水中にいる潜水艦に、水上の話し声が聞こえるはずはないのだが。「エンジンを止めているから、この船のことを気づかれることはありませんよね」

アップル大尉は私を見つめ返した。月の光を受けて、顔は青白く光っている。

「海岸のすぐそばだからな。波の音が邪魔で、ソナーが何かの役に立つとは思えんよ」

私ははつとした。思わず見回したが確かにそのとおりで、岩にぶつかって碎ける波の音が私たちを取り囲んでいる。私たちは海岸からたった50メートルほどのところにいるのだ。小さな声だが漁師たちが笑い始めたので、私はひどく恥ずかしくなった。彼らから見れば、私など何も知らないただの子供に見えるのだろう。

月が明るいせいで、陸の地形はかなりよく見てとることができる。

岬はもうそこまで迫っている。帆をたたみ、私たちはスピードを落とした。

波を立てないように、ゆっくりとイカリを下ろした。だが海底に届くほど深くではなく、ほんの数メートルだ。船の左右に一つずつあるので私と若い漁師の一人が水に入り、身体が浮かび上がってしまわないようにイカリにつかまりながら、水中を偵察することになった。

ローレライのライトは強力で、すぐに見つけることができた。見つけたのは私ではなかったが、水上に顔を出し、若い漁師は興奮した様子で言った。

「あそこにいる。ぎらぎら光ってるよ」

「距離は？」アップル大尉が言った。

「よくわからないが、200メートルぐらいかな」

私たちは水から上がり、すぐにボートが下ろされた。ボートは3そうあり、二人ずつ乗ってオールを手にしていた。私はヒルと一緒にになり、ボートをこいでいった。

船から離れ、ボートはゆっくりと水の上を進んでいった。私のいるボートには帆に使う布や古いシャツが一抱えひとかか積まれていたが、他の2そうは違っていた。漁に使う網を積んでいたのだ。太い縄で作られた大きなものでボートの上に山盛りになり、こぎ手たちは窮屈きこくそうにしている。おまけに魚網は重いので、もう少しで沈んでしまいそうなほどボートは水にめり込んでいる。

潜水艦が近づくと、もう水に潜らなくても、オールを少し深くか

ざすだけで、ローレライのライトが照り返すのを見ることができるようになった。その光がだんだん強くなるので、自分たちが潜水艦に近づきつつあると知ることができる。

とうとう私たちは、水の上にシュノーケルが突き出しているのを直接見ることができるよう場所までやってきた。ただの金属製のパイプに過ぎないが、まるで海底に突き刺さった杭のように、波の間に垂直に突き出している。

シュノーケルまであと10メートルというところまで行き、私とヒルはボートを停止させた。ヒルが振り返り、他の2そうに合図を送った。

あちらのボートにいるアップル大尉がなにやら指示を出しているのが見える。シュノーケルの位置から計算して、スクリューがどのあたりにあるのか見当をつけようとしているのだろう。

だがそれは、この潜水艦がどの方向を向いてとまっているかわからないと難しい仕事だ。しばらくの間彼らは水の上を成果なくこぎまわり、時間を費やしてしまった。だがとうとうスクリューを見つけ、アップル大尉の顔がにんまりと輝くのが見えた。

水の中に入り、アップル大尉たちがスクリューに魚網をからみつかせるまで、私とヒルは数分間待っていないではならなかった。水中での作業なのだから、簡単ではなかっただろう。それでもなんとかうまくいったようで、アップル大尉たちがボートの上にはいるのが見えた。合図を受け、今度はヒルと私が仕事に取りかかる番だった。

ゆっくりとだが潜水艦のエンジンは動き続けているので、シュノ

ーケルの先から排気ガスが立ち昇っている。それが匂うので、私たちは風上からボートをこぎ寄せることにした。

ぎりぎりのところまで、うまくシュノーケルに近寄ることができた。ヒルに身体を支えてもらいながらボートの上で立ち上がり、私は仕事に取りかかった。波は穏やかで、シュノーケルの開口部は低いところがあり、難しい作業ではなかった。

丸いパイプをぶつ切りにしたような形で、シュノーケルは空を向いて開いている。そこから新鮮な空気を取り込んでいるのだ。その穴のそばへ私は布を持っていった。最初、布はまるで掃除機の口のようにひとりでに吸い込まれていった。だがそれも、パイプの内部が詰まり始めるまでのわずかの間のことでしかなかった。

すぐに空気の流れはとどこおり始め、指先にもほとんど感じられなくなった。パイプの中へ、私はせっせと布を押し込みはじめた。

我ながらよくがんばったものだと思う。ボートの上に一抱えあった布は、すぐに品切れになってしまった。すべてシュノーケルの中に詰め込まれ、フタをしてしまったのだ。プスンと音を立ててエンジンが停止したのは、そのときのことだった。

私とヒルは再びボートをこぎ、潜水艦から離れ始めた。潜水艦の乗員たちは、今ごろ頭をひねっていることだろう。エンジンが突然停止した理由がわからないだろうし、自分たちが吸う空気の循環が止まっていることにもすぐに気がつくに違いない。

それに気づいたときの彼らのあわてぶりは簡単に想像がつくが、もちろん原因を調べようとするだろう。そのためにやることは一つしかない。

私たちが見ている前で海面がざわめき、白く波立ち始めた。圧縮空気を使って、潜水艦がバラストタンクの中を空にしようとしているのだ。そうなると船体が軽くなり、潜水艦は浮上することになる。

安全な距離まで離れ、私たちは眺めていた。アップル大尉が言ったとおり短いずんぐりとした潜水艦で、あまりスマートな形ではない。ハマキのようというのは本当にふさわしい言い方だ。

水面に顔を出すすぐにハッチが開き、乗員が姿を見せた。突然の故障にあわてているようで、まわりを見回す余裕もなく、私たちになど気づきもしなかった。もちろん私たちも明かりを消し、息を潜めていた。

ハマダラカ潜水艦兵は、シュノーケルの点検を始めた。そして何が起こっているのか気がついたのだろう。憎々しげに声を上げ、シュノーケルの先端に見えている布を取り除こうとした。だが一人や二人の力でどうこうできる状態ではない。布は奥深くまで徹底的に押し込んであるのだ。

悪態についてシュノーケルから降り、ハマダラカ兵は闇の中を見透かそうとした。これが誰かの手になる破壊工作だということは明らかだからだ。アップル大尉が合図をし、漁船が電灯のスイッチを入れたのは、その瞬間のことだった。

船全体が明るく照らし出され、夜の海面に浮かび上がった。同時に3そのボートの姿も照らされたに違いない。あっと大きな声を上げ、ハマダラカ兵はハッチの中へ駆け戻っていった。ボタンと大きな音を立てて、ハッチが閉じた。

「どうするつもりなのかしら？」私はつぶやいた。

「決まっているさ」ヒルが答えた。「バッテリーの力でモーターを回して逃げようとするだろうな」

「それだと1時間ぐらいしか走れないはずよ。バッテリーの電気はすぐになくなってしまうもの」

ヒルは笑って私を見た。「それどころか、スクリューを回すことだって難しいさ」

ヒルがそういい終わると同時に、潜水艦の船尾あたりで大きな水しぶきが上がった。スクリューが回転を始めたのだ。だがあまり元気のある回り方ではなかった。どことなく力がなく、弱った魚のような感じた。何重にもからみついた魚網が邪魔になっているのだろう。

しかしモーターの力というのは恐ろしいもので、潜水艦はゆつくりとだが動き始めていた。かじを切り、へさが右を向き始めている。外海へ通じる方向だ。私たちは顔を見合わせるしかなかった。

「スミス！」水の上を越えて、アップル大尉の声が聞こえてきた。

「はい」振り返り、私は叫び返した。

「やつは外海へ逃げる気だ。おまえはすぐに漁船へ戻れ。急いでクジラを連れてこい。潜水艦を追跡するんだ」

その声は、漁船の上に残っていた漁師の耳にも届いていたに違いない。すでにエンジンをふかし、私にむかってかじを切る姿が見え

ていた。

ボートを寄せ、縄ばしごをつたって私が甲板の上にあがるころには、漁船は町へ向かって全速を出していた。ヒルたちを乗り込ませる余裕はなかった。彼らはあそこでしばらく待つことになるだろう。

大きな島ではないから、チビ介のいる船小屋まで遠いわけではないのだが、私はあせりを感じないではいられなかった。へさきに立ち、ずっと前方をにらんでいた。

船小屋に着き、チビ介を海に出すまで15分もかからなかったに違いない。だが私にはとても長い時間のように感じられた。時間を節約するため、潜水服を身につけることはあきらめなくてはならなかった。水着のまま、私はチビ介のベルトにつかまったのだ。

潜水艦に追いつくにはもう少し時間がかかってしまった。うまく発見できるだろうかという不安がなかったわけではない。再び潜水してしまっている可能性が高いのだ。

だがあまり心配する必要はないようだった。偶然だが、私たちがスクリューに巻きつけた魚網にはガラス製の浮きがいくつか取り付けられていたのだ。漁をするときに網が水面近くにとどまるようにするためのものだが、ボールのように丸い形で、数十センチの直径がある。潜水艦は潜水し、波の下に姿を消していたが、この浮きが水面に見えていて白い波を引くものだから、よい目印になったのだ。私とチビ介はすぐに追いつくことができた。

風船玉をもらって、大喜びで空に浮かべて歩いている子供のような眺めだが、もちろん乗員たちは気づいてはいないだろう。スクリューの力で魚網は引き裂かれ、それでも切れてはしまわず、ロープ

のように長く伸びている。月光を受けて輝くガラス玉は簡単に追いかけることができた。

潜水艦がどこへ行くつもりなのかはわからなかった。だが、どうせ長くはもたない。あと数十分でバッテリーは空になり、やつは浮上するしかなくなる。それまで私はのんびり着いていけばいい。

夏の夜明けは早い。速度をゆるめ、潜水艦が浮上を始めたのは、東の空がうつすらと明るくなるころだった。

少しでも疲労を防ぐために、チビ介は私を頭の上に乗せて運んでくれていた。そこだと、ベルトにつかまりつつも腹ばいになることができる。空気パイプをつなぐ接続装置が、波よけの代わりになってくれる。

まったくこれは、のんびりした仕事になった。チビ介の肌をなでてやりながら、ときどき私は波をもてあそんだ。雲はなく、月と星がくつきりと出ている。星を見ながら目分量ではあるが、時間つぶしに方位を測ってみたほどだ。

手のひらを押し付けると、チビ介の肌を通して心臓の脈動を感じ取ることができる。クジラは分厚い脂肪層を持っているからごくかすかではあるが、それでもちゃんと感じることもできるのだ。船に乗って甲板に横たわっても、エンジンの響きを感じることはできる。船のエンジンもクジラの心臓も同じようなものではないかという人もいるかもしれないが、私は賛成できない。

そうやってチビ介もリラックスして、のろのろと進むガラス玉を追いかけて続けたのだが、とうとう停止し、潜水艦が浮上を始めたのだ。

水面に白い波が広がるのが見えた。合図を送り、私はチビ介に安全な距離を取らせた。

昇り始めた朝日を受け、潜水艦はゆっくりと姿を現した。へさきが鳥のクチバシのように開く仕掛けになっているし、例の小さな水中翼もちゃんとついている。間違いなくローレイ型潜水艦だ。

水着のまま潜水服もなくといっても、私も信号銃だけは持つてきていた。腰のベルトに突き刺してあったのだが、手に取り、ゆっくりとチビ介の頭の上に立ち上がった。

ガタガタと音が聞こえ、乗員がハッチを開こうとしているようだ。空に向けて、私は信号銃の引き金をひいた。パンと音がして弾が打ち上げられ、何百メートルか上空で大きくはじけ、ボンと大きな音を響かせた。白い雲のような煙も広がった。水平線に隠れかけてはいるが、島はまだ見えている。きつと誰かが気づいてくれるだろう。

ハッチを開けて身を乗り出したハマダラカ兵と、私は間近に顔を合わせることになった。金髪の若い男だったが、私が信号弾を発射したことにはすぐに気がついたに違いなく、ひどく不快そうな、つらそうな顔をした。自分たちのこれからの運命を悟ってしまったのだろう。

思っていたとおり、島の方角からすぐに飛行艇が二機姿を見せた。着水するまで十分もかからなかった。もちろん武装したヒトリ兵たちが乗り込んでいる。あきらめたと見えて、ハマダラカ兵たちは何の抵抗も見せなかった。念のため高速艇が到着するのを待ってから、私は現場を離れた。チビ介に合図を送り、島へむかってゆっくりと戻り始めたのだ。

チビ介を船小屋に入れ、上陸すると、驚いたことにヒルが迎えにきてくれていた。小さな馬車に乗っていて、着替えた私を町まで連れ帰ってくれた。

もうすっかり日が高くなっていたが、ベッドにもぐりこんだ私は翌朝まで目を覚まさなかった。誰も邪魔をせず、そのまま寝かせておいてくれた。

目が覚めたとき、島にはもうほとんど軍人の姿がないことに気がついて、私はひどく驚いた。少し早い朝食の時間だったので、着替えて私は階段を降りていった。

食堂にはヒルがいて、テーブルクロスの上に皿やフォークを並べているところだったが、ヒトリの軍人たちは今朝早くほとんどが島を離れてしまったのだと教えてくれた。ローレイは本土の基地へ向けて曳航^{えいこう}され、乗員たちは拘束され、あの竜騎兵も救出され、飛行艇で本土の病院へ運ばれたということだった。洞窟から助け出されるとすぐに意識を取り戻したが、足に負傷しているから入院させたのだという話だった。

島の風景はいつも同じように穏やかだったが、軍の上層部や政府は今ごろ大騒ぎをしているに違いなかった。領海内で敵国の兵が活動していたのだ。しかもその目的もまだ不明なのだ。それについてはもちろん尋問が行われるのだろうが、ハマダラカ兵たちも簡単に口を割ったりはしないだろう。

ローレライの船内も搜索されるだろうが、おそらく何も見つからないだろう。信号弾を打ち上げた直後、私が見ている目の前で、ハマダラカ兵たちは書類のたばを海に投げ捨てたのだ。一瞬ふれただけで簡単に水に溶けてしまう特別製の紙を使った書類に違いなかった。

だがハマダラカ兵たちが与えられていた任務が何だったのか、私は見当がつくような気がしていた。でも自信があつたわけではない。アップル大尉に正式に報告する前に、少し調べてみる必要があると思った。だからポケットから取り出したスパーク船長の指輪をテーブルの上に置き、私はヒルに見せたのだ。

「それはいつたい何だね？」

目を大きく開き、ヒルはおどけた表情を装ったが、私はごまかさなかった。ヒルの目の前にかざし、私は3つの三角形模様を指さしたのだ。その意味をヒルはすぐに理解したようだった。私は口を開いた。

「最初あなたは、どうして気がついたの？」

ヒルはため息をついた。「ほんの偶然さ。もう何年も前、嵐が近づいて風がひどく強い日のことだったが、海岸べりを歩いていて、ある岩の割れ目からえらく潮くさい風が吹き上げてくることに気がついた。調べてみると、岩の間に人がやっと一人通れるだけのすき

まがあり、好奇心に駆られて、オレはそれをたどっていったのさ」

「それで？」

「数メートル進むと穴は突然広くなり、洞窟にぶつかった。地質の関係で、この島には天然の洞窟がいくつもあることは知っているだろう？ その一つだったのさ」

「それから？」

「洞窟は半分水につかっていた。海の水さ。この洞窟には、海の側にももう一つ入口があったんだ。ハマダラカの竜騎兵は、オレとは逆にその入口から洞窟の中へ入ろうとしていたんだな」

「あんたは財宝を見つけたのね」

「ああ」

「どんなものだったの？」

「洞窟の内部は岩の壁ばかりで、始めは何か隠してあるようには見えなかった。だがじっくり眺めていて、岩壁が一カ所だけ、不自然に色が違うことに気がついた。それは自然の岩ではなく、コンクリートで塗り固めたものだとすぐにわかった。長い年月でヒビが入っていたから、引きはがすのも難しくはなかった」

「どんな宝が出てきたの？」

「一抱えある木箱^{ひとかか}だったが、中身は金貨がつまっていた」

「へえ」

「オレは大喜びしたが、調べてみると金貨といっても使われている金の純度が低く、思ったほどの値打ちはなかったな。それでもちよつとした金持ちにはなれた」

「そのお金でこの宿屋を建てたわけね」

「しかしあんた、どうして気がついたんだね？」

「何言ってるの？」ポケットに手を入れ、私はあの小さなコインを取り出した。「船小屋の入口の前に、あんたはこれをわざと落としていったのでしょう？」

「なぜそう思うんだね？」

「話してくれたのはあんた自身なのだから、私がスパーク船長の財宝のことを知っていることはあんたも承知しているわけだし、私が三角岩に関心を持っていることもあんたは知っているじゃないの」

「ふん」ヒルは機嫌よさそうに笑った。「あんたをからかってやろうと思ってるね。いたずら心を抑えきれなくなったのさ。しかしあんたは、財宝のことを上司に報告するのかい？ 軍から呼び出されて、オレは話を聞かれたりするのかい？」

「ううん」私は首を横に振った。「もちろん一応は報告するわ。ハマダラカが何のためにこの島に来ていたのか、理由を明らかにしなくちゃならないからね。軍から人が来て、あの洞窟を調べるだろうと思うわ。けどあんたが見つけたんだから、財宝はあんたのものよ。海軍は形だけ調査をして、きつとすぐに終わらせるだろうと思

う」

「ハマダラカの連中も宝の話をどこかで聞きつけて、調べにきていたんだな」

「そうでしょうね。何十年か前のゴールドラッシュのとき、島の土地は調べつくされてしまったから、ひそかに竜騎兵を送り込んで、海中を調べていたのでしょうね」

「そしてあの洞窟を調べていたとき、突然岩崩れが起こった」

「アップル大尉の話では、洞窟全体が崩れかかっていた、かなり危険な状態だったそうよ。岩崩れにあわなくて、あんたは幸運だったのよ。ハマダラカ人も無謀なもんだわ」

ヒルはにっこり笑った。「どうだっていいさ。もうハマダラカの連中もこの島には興味を失っただろう」

「そうあってほしいわ」

ヒトリ海軍も、やがて私やヒルと同じ結論を出したようだった。ロック諸島の警備は今後必要なしということになり、私にも撤退が命令された。

夏の終わりの明るいい日、船小屋の前に404号飛行艇が着水し、チビ介と私を乗せて、本土へ向けて飛び立ったのだ。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520d/>

海の竜騎兵 2

2010年10月8日21時44分発行